校長室だより　第１号

三刀屋高等学校・掛合分校　令和３年４月１４日

４月１日校長として赴任しました山﨑誠です。まだ、校長室だよりの名前もなにも決めておりませんが、情報発信の一つとして、当面は学校のホームページで発行していきたいと思います。

最初は始業式での話を掲載します。次号は、入学式の式辞を掲載予定です。

始業式での話（抜粋・一部改変）　*始業式では割愛した部分を一部掲載しています。

今年度のスタートにあたり、これまでの合い言葉（凡事徹底、日々新生、志あるところに道はある）をもとに、新たな合い言葉を作りました。

『小さな挑戦、小さな善行、確かな志　～自立した大人となるために～』　です。

「自立は自ら立つと書きますが、自らを律する自律も含んでいます。この言葉を選んだのは、みなさんに自立した１８歳として高校を卒業してほしいからです。しかし一言で自立と言っても人それぞれとらえ方が違うし、現在の状況も違います。必ずしもすべてが自分できるようになるという意味でもありません。自立とはなにか各自で考えてください。自分にとって自立した姿はどういう姿なのか、その姿になるには何が足りなく、何をしなければいけないのか。

これからの学校生活の様々な場面で、成長するチャンス、挑戦するチャンスがあると思います。しかし、自分が意識していないとそのチャンスや挑戦はただのイベントで終わってしまいます。

また、凡事徹底、あたりまえのことをあたりまえにする中で、つまりしっかりとした生活を送る中で、そのチャンスは見えてきます。

だからこそ、常に自立と言う言葉を、キーワードとして意識してほしいと思います。

そして「小さな挑戦、小さな善行、確かな志」に込めた意味から、みなさんに二つお願があります。

一つ目は、小さな挑戦であってもいいので、明日の自分に会うのが少しでも楽しみになるようなことを日々意識し取り組んでもらいたいのです。「日々新生」、本当に小さいことでもかまいません。例えば、１０分ほど勉強時間をいつもより長くしよう、そんな小さな挑戦・変化でいいのです。成長は変化の結果です。学習でも、部活動でも、家庭での生活でも何でもいいです。それを考え、失敗を恐れず取り組むことがそれぞれの自立につながると信じています。なによりも学校は、挑戦し失敗からも学ぶ場所です。たとえば、カーネルさんは、1,009 回も営業で断られたそうです。挑戦し、あきらめず、志をもってそれを続けることが大事です。マラソンも、完走には、まずはスタートラインにたつこと、１歩を踏み出すこと、それが大事です。

二つ目は、小さな善行。一日一善という言葉がありますが、ほかの誰かを思ってなにかをすることで、他者を尊重する、気遣う気持ちが育ちます。廊下のゴミを拾う、そんな小さなことでいいのです。マスクの着用や手指消毒、検温など、自分のためにも、みんなのためにも徹底する。それも気遣いの一つです。気遣いができると、応援される存在になります。応援は自分の成長、成功にもつながります。一人一人にその気持ちがあれば、いじめもない、安心・安全な学校となるはずです。

水泳の池江選手が「出口の見えないトンネルはない」という医師の言葉を信じて病魔と闘ったと言っておられました。今のような世の中だからこそ、確かな志をもってほしい。志は、小さいか大きいかは関係ありません。確かな志はぶれない自分をつくります。

なによりも学校は、夢と絆を育むところです。仲間共に、自分の夢や志を実現できるようがんばってください。それでは、皆さんが今を大切にして、一生懸命取り組み、気概に富んだ一年になることを願って、始業式にあたっての話とします。

校長室だより　第２号

三刀屋高等学校・掛合分校　令和３年４月１５日

今回は、入学式の式辞を掲載します。
校長室だよりの名前はまだ決まりませんが、今後の掲載内容を考えながら、いずれつけたいと思います。

令和３年度入学式 式辞（抜粋・一部改変）　*本校・分校で共通するところのみ掲載しています。

春の風が、学校に花の匂いや鳥のさえずりを運んでくれる今日の良き日、令和３年度の入学式を執り行うことができますことは、本校関係者一同大きな喜びです。学校を代表し、深く感謝申し上げます。

本来であれば、同じ式場に来賓の方々の御臨席を賜り、また在校生も一緒に皆さんの入学を盛大に祝福するところですが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、このような形の入学式挙行となることをどうかご理解ください。

ただ今、入学を許可いたしました新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

在校生、教職員一同、皆さんの入学を心から歓迎いたします。

保護者の皆様におかれましても、お子様の御入学おめでとうございます。これまでお子様を育ててこられました皆様に敬意を表しますとともに、私ども教職員に課せられた責任の重さに、身の引き締まる思いでございます。

皆さんは、この伝統ある高校の生徒として、本日その第一歩を踏み出すわけですが、ここでの３年間で、皆さんは社会のどこかを支える、なくてはならない人へと成長していくことになります。

そして、この三刀屋高校が、皆さんの成長するステージとなるのです。

折しも先月東日本大震災から 10 年が経ちました。

新型コロナウイルスが未だ収束しない中、あらためて心に浮かんだ言葉が、「夢と絆」です。

北朝鮮に 24 年間も拉致され、2002 年に帰国された蓮池薫さんがその著書や講演で次のようなことを語っておられます。

「拉致されて北朝鮮に連れてこられ、将来の夢を描くこともできない。家族も友達もまったくいない北朝鮮で、自由もなく、絆もないことにただただ絶望した。」

今私たちががんばれているのは、夢や絆があるからです。東日本大震災からの復興にも夢と絆が欠かせませんでした。夢と絆を大きく育むのが学校です。夢と絆を抱けること、持てることに感謝し、高校３年間でそれぞれの夢と絆をさらに育み、成長して欲しいと思います。そういう思いを込めて

「小さな挑戦、小さな善行、確かな志　～自立した大人となるために～　」という言葉を贈り、式辞としたいと思います。これを学校での合い言葉とすることにしました。

人は何もせずに成長することはできません。成長のためには挑戦することが必要です。

小さな挑戦でいいのです。成功しようが失敗しようが、挑戦を通し人は成長します。

だからこそ、学校は、「安心して挑戦し失敗からも学ぶことができるところ」でないといけないと思っています。そして、それぞれが確かな志をもち、あきらめず続けることが大事です。

小さな善行という言葉をつけたのは、自分以外の誰かのためになにかをしようという気持ちや思いやりをいつも持っていて欲しいからです。

廊下のゴミを拾う、なんでもよいのです。それは、誰かが気持ちよく廊下を歩くための行いであり、自分以外の誰かを大切にするということです。マスクの着用もそうです。

マナーは、相手のためにもあることと同じです。相手を気遣う気持ちが、絆のある学校をつくっていくことにつながります。それは、安心安全な環境の中で、学べる学校であることにもつながります。また、挑戦し、成長する過程で得た自信や矜持を次への挑戦と、人への優しさに使える人であって欲しいと思います。

最後に、保護者の皆さまに、お話しいたします。

家庭と学校が協力・連携し、教育に当たることが、何よりも大切なことは、言うまでもありません。連携には、「連絡を密に取り合って、一つの目的のために一緒に物事をすること。」と言う意味があります。なにとぞ学校を信頼していただき、家庭と学校との風通しを良くしながら、お子様の成長に向け、一緒に取り組みたいと思いますので、よろしくお願いします。

３年後の卒業式の際、ここにいる新入生が、心身ともに自立した 18 歳の大人に成長し、そしてこの高校に来て本当によかったと思ってもらえるよう教職員が一丸となって尽力することをここにお誓い申し上げ、式辞といたします。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第３号

令和３年４月１５日

○校長室だよりの名前を「絆」とすることにしました。

先日、地域の方からお便りをいただきました。内容の詳細は、ご本人の許可を得ていないのでここでは紹介できませんが、三刀屋高校の生徒の活動に対するお褒めと応援の言葉で綴られていました。こうして、高校の教育活動に関心と期待を寄せていただけることは、生徒はもちろん、教職員も大いに励みになるところです。

このお手紙に、「絆」と書かれた書が同封されていました。高校と地域・ご本人との「絆」を感じて書かれたものです。ちょうど、入学式の式辞等で、学校は「夢と絆」を育むところであると話をしたところでした。これを縁と感じ、「絆」を校長室だよりの名前にすることにしました。タイトルの題字は、同封されていました書を載せています。

今後、学校の内外で絆を広げ深めていくことで、ますます三刀屋高校、掛合分校の教育活動が充実したものとなり、そのことで生徒、教職員、保護者、地域の方々に多くの幸が降り注ぐことを願って、この題字を使っていきたいと思います。

○「挨拶」の大切さ

４月も中旬となり、部活動の各種大会が始まっていきます。

放課後、いくつかの部活動を見学しにいきました。どの部活動においても、生徒たちが大きな声で、「こんにちは」と挨拶をしてくれます。見学する者にとっては、邪魔にならないか恐る恐る近づいているのですが、挨拶一つで、受け入れられた気持ちというか、見学しても大丈夫、ここにいて大丈夫という気持ちにさせてくれました。分校から本校に練習に来ている生徒が、わざわざ近づいて来て挨拶してくれたこともありました。朝の「おはようございます」の一言が、お互いの朝の微妙な心理的な距離感を一気に縮めてくれるのと同じです。安心安全な学校・環境づくりには、まずは「挨拶」からだと感じたところでした。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第４号

令和３年４月２７日

○校長室だより･･･

（隠岐）西郷岬灯台から西郷湾を臨む⇒

校長室だよりをどういう思いで、なにをねらいに出すのか、はずかしながら自分の中でまだはっきりしていないのが実情です。教頭時代の最初の2年間でご一緒した、当時の隠岐養護学校の野津保校長先生が、校長室だよりを出しておられ、あらためてどういうねらいで出されていたか読み返してみました。校長室だよりの名前は「閑適（かんてき）の窓から」。管理職勤務も、特別支援学校勤務も、単身赴任もはじめてで不安と緊張の中で着任した時に、校長先生から「新着任のみなさまへ」というお手紙とともに「閑適（かんてき）の窓から」44 号をいただきました。そこには、「仕事の周辺部分（直接日々の仕事の話題は取り上げない）や隠岐の話題などをひまつぶしに書き、ひまつぶしに読んでもらうのを原則としています」と書かれていました。そして、「すべてがバラ色というわけにはいきませんが、失敗やまちがいをおかしながら、みんなでよりよい職場をつくって、よりよい実践を作り出すことができればいいなと思っています。」と綴られていました。その言葉で安心した気持ちになるとともに肩の力が抜けた感じがしたのを覚えています。令和3年度の重点目標等で、本校･分校共に「～安心して失敗できる学校～　安心･安全な学びの環境づくり」を掲げたのは、この時の思いが一つあるのだと思います。3年間で133号出され、45号からを楽しみに読んだことを思い出します。手書きのやさしい字で紙の色を毎号変えてあるのも気遣いだったと思います。そして毎回必ずすべての教職員の机に置いて回っておられました。今思えばそれをきっかけに話をしたり声かけをしたりするなかで、報告や相談をしやすい雰囲気をつくっておられたのだと思います。

合い言葉にした「～自立した大人となるために～」の“自立”について、「閑適の窓から」で触れておられる号があります。そこには「自立していくということは、必死になっている自分の積み重ねである。と同時に、必死になっている自分に必ず寄り添ってくれている他者を忘れてはならない。自立は誰の手もかりず一人でがんばるという意味ではなく、他者の存在をよりどころにして自分でがんばることととらえるものだと思う」と書かれていました。合い言葉にした「小さな挑戦、小さな善行」に込めた思いに通じるとあらためて思うとともに、知らず知らずと校長先生の言葉や学校経営等から学んでいたことを実感しました。そのあと転勤した当時の松江東高校の永瀬校長先生が掲げておられた合い言葉「自立への道程（みち）」でも同じ思いや学校経営に出会いました。そうした出会いがあって今の自分があるのだと感謝するとともに、「職場は一将の影」という言葉をかみしめているところです。

次号では、『教員研修』という本の“師の教え”というコーナーで紹介されていた「人を信じるということは、裏から疑うということ」という言葉に触れて、私なりに考えたことを書きたいと思います。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第５号

令和３年４月３０日

○信じるとは・・・

伐採前の分校のメタセコイア3本⇒

『教員研修』(2019.12)の“師の教え”の欄に、「人を信じるということは、裏から疑うこと」という言葉がのっていました。投稿された方は小学校の校長先生で、中学1年生の頃に担任から授かった言葉だそうです。その言葉の意味をずっと追い続けていて、今は、「人を信じるには、もし信じる方向にことが現れないとき、人を助け実現するための手立てを用意することが大切である」と捉えていると書かれていました。例えば、学校で生徒が希望する進路に向けてがんばっていたら、その実現に向けた努力の軌跡を信じ、その手助けをするのが教員の役割であるという意味でしょうか。

この言葉を自分なりに考え、その考えを、今年度最初の分校職員会議で、「うちの子にかぎって」という話で一部説明しました。本校では時間がなく話せなかったので、この校長室だよりで少しその意図を説明します。

「生徒(子ども)を信じるということが、その生徒(子ども)の成長や変化の把握をしないことにつながってはいけない。生徒は常に小さな挑戦を繰り返し小さな変化の積み重ねの中で自立に向けて日々成長をしている。だから、良い意味で生徒の事を疑って欲しい。小さな変化を見逃さず、褒めたり、認めたり、慰めたり、助けたりして欲しい」。そんな話を、2年前の教育センター部長時代に、たしか11年目研修の閉講式で話をしました。

テレビドラマなどで、子どもが悪いことをして呼び出された時の保護者の常套句に、「うちの子にかぎって」という言葉を耳にすることがあります。「ここであなたの言われる“うちの子”とは、いつの時点での子どもの姿ですか？」と言いたくなることがあります。言いたいことは、いつも生徒(子ども)の成長や変化に目を向けて欲しいということ。そして、うまくいっている時は褒め、目指す夢に向かってうまくいかず、志や決意が揺れているような時は、教員や保護者はそっと手助けをして欲しいということです。また、教員は学校での成長や変化を、保護者は家庭での成長や変化を相互に連絡を密にして伝え合い、お互いで「うちの子にかぎって」とか「Aさんは大丈夫と思っていました・・・」というようなことを言わないような連携をして欲しいという意味で、「うちの子にかぎって」と言わせないという話をしました。家庭と学校との連携において大切なのは、目的を共有することであり、かつ対話が重要であることは言うまでもありません。そういう意味でも、PTA活動はとても大切と考えています。

今放送している月9のドラマ「イチケイのカラス」で同じようなセリフがありました。「疑うことは信じること」、「信じることは相手を知って初めてできること。疑って真実を知ることで初めてどういう人間か知ったから信じることができた」「単に信じることは知ることの放棄」。そんなセリフだったと思います。

情報化社会にあって、主体性を育み、疑うことで自分から真実を、正しいと判断できる情報を取捨選択できることが大事だと思います。なによりも、自分にとって都合のいい情報のみで判断しないことが大事です。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第６号

令和３年５月７日

○対話とは･･･

三刀屋高校遠景⇒

『島根県の合戦』(いき出版 2018)で幕末期の「隠岐騒動」を担当したのをきっかけに、「対話」について考え学校広報誌に寄稿したことがある。ちなみに、雲南に関係するところでは、戦国期の「三刀屋石丸城籠城戦」や「地王峠の戦い」などが収録されている。

隠岐騒動は、松江藩の預かり地となっていた幕領である隠岐國が、明治維新を期に、島民たちの決起によって松江藩の郡代を島から退去させ、自治政府を樹立した出来事である。隠岐騒動が、『レ･ミゼラブル』で描かれた時代の出来事である、世界史的に有名な革命的都市自治体政府であるパリ･コミューンよりも早いことはあまり知られていない。隠岐騒動では、島民が追放する郡代を乗せた船に餞別(せんべつ)として米や酒を積んだと伝わっている。革命的な行動であるのに郡代の命を奪わずに追放したことと合わせ、隠岐古典相撲に流れる精神を垣間見ることができる。

コミュニケーションには、「対話による合意形成」という意味もある。世界に先駆けた自治政府が隠岐で樹立できた要因は、誰かに扇動(せんどう)されたり、暴発したりしたのではなく、隠岐国を良くしたいという強い思いのもと、納得いくまで島民同士の対話がおこなわれ、その上で成された合意のもとで統一した行動をとったこと。さらに、相手（郡代）ともねばり強い交渉（対話）をおこなったことにあると考えている。

「グローバル企業のような多様な人材がいる組織では意思決定が逆に早い。それは、バックボーンが異なる人が集う場では、数字･ファクト･ロジックで議論するしかないので忖度などない合理的で素早い意識決定がなされるからである。」とライフネット生命創業者の出口治明氏は、あるインタービューで話しておられた。これからのグローバル社会においては、合意形成を導くためになされる対話の中で、エビデンスが重要視されていくことは確かだと思うが、対話が人と人との会話である限り、そこには感情や思いというものがあるし、それを忘れてはAIと同じになってしまうことを忘れてはならない。

笑顔は、人間にとって最初に獲得するコミュニケーションである。それぞれの心の中にある「私、よくがんばった。」「私ってすてたもんじゃない。」という“今の自分に対する素直な満足感や肯定感”が笑顔の源ともなっている。そのためには、エビデンスに基づく会話をしながらも、自分自身が尊重される感覚が大事であるし、だからこそ相手のことを尊重し認め合うことが大事である。

しかし、対話の中で前向きでない言葉が出ることは当然ある。相談においては、「悩みを話すことは、悩みを離すこと、手放すこと」とも考えるそうだ。対話においては、結論を急ぎ過ぎず、またすべてを論理的に合理的に解決していこうとするのではなく、宿題として残すくらいの余地が大事であると考えている。それが語り合うことであり、これからのグローバル社会において捨ててはいけない部分ではないだろうか。余地のない合意形成は、ファシズム的にもなりかねない。つまり、対話においては、相手の意見を受け止め、互いを尊重し合うことに加え、心と会話に余裕を持つことが重要と考えている。

「主体的･対話的で深い学び」が、令和4年度の高校1年生からはじまる学習指導要領の中でうたわれている。全国の各高等学校においては、すでにこうした授業が浸透しつつある。そんな今だからこそ、対話の意味を自分なりにしっかりと考えるべき時だと考える。

※今回の校長室だよりは、松江東高校教頭時代に寄稿した原稿を加筆・修正したものです。

★「校長室だより」は、学校ホームページに不定期掲載しています。ぜひ学校ホームページをご覧ください。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第７号

令和３年５月１０日

○台湾研修

中正紀念堂（中華民国初代総統蒋介石の顕彰施設）⇒

新型コロナウイルス感染症の終息が未だ見えない中、昨年度に続き、残念ながら今年度も台湾研修旅行を中止とすることになりました。楽しみにしていた生徒に対して本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。

交流活動を予定していた台湾の真理大学の担当者からは、「コロナの影響で活動を中止せざるを得ないことはとても残念ですが、来年状況が改善されたら、交流の再開ができることを心から祈念しています。」というお言葉をもらっています。台湾との「絆」までが切れたわけではないことに感謝しつつ、生徒のみなさんには、台湾への関心を持ち続け、いつかは訪れて欲しいと願っています。

私は、2度ほど台湾を訪れたことがあります。1度目は今から25年ほど前で、台湾全土を1周しました。2度目は20年ほど前で、台湾の中学校で教員をしている友人を訪ねて行きました。2度とも訪れたのが、故宮博物館と中正紀念堂です。北京にある故宮博物館にも行ったことがありますが、関心がなければなぜ同じ名前の博物館があり、収蔵品も違うのかもわからないと思います。旅行で訪れて歴史や現実を肌で感じたことで、知識としてではなく、実感として台湾を理解できたと思っています。蒋介石の享年にちなんだ 89 段の階段がある中正紀念堂。これほどの規模の個人の顕彰施設を国が建てるのは、日本では考えにくいことかもしれません。そうした、文化や歴史認識の違いを知り、考える契機とすることが海外を研修旅行先とする意義の一つです。

文化的な違いが、経済的あるいは政治的な利害と結びついた時、文化が紛争や摩擦を激化させる種となることは歴史や現実が物語っています。だからこそ、文化を理解していくことは、平和を守ることにもつながります。

昨年お亡くなりになった台湾の第4代総統の李登輝氏の自伝を読んだことがあります。うろ覚えですが、いわゆる本省人としてはじめて総統になった、日本が台湾を植民地支配していた時代に京都大学に在籍したこともある李登輝氏の中学校時代の出来事が印象に残っています。遠足で台北に行く前日の夜、父親に欲しいものがあるかと聞かれ、「百科事典」と答えたため、父親が悲しそうな顔をしたそうです。今はインターネットでいろんなことを簡単に調べることができますが、当時はそういうわけにはいきません。百科事典は相当に高価なものです。翌朝出発の見送りに姿のなかった父に対して申し訳ない気持ちになったそうです。しかし、バスに乗り込んだあと窓をたたく音が・・・。そこには、一晩中親戚を回って頭をさげてかき集めたしわくちゃのお金を握った父の姿があったそうです。子どもの将来のために、勉学のために、親としてなんとかしたいと思って行動した父の姿を忘れることはできなかったと思います。ドラマ「北の国から’87 秘密」のラストシーンで、純が手にした泥のついた1万円札を思い出すのは私だけでしょうか。

親が残したい財産とは、お金でなく、教育でつく力など人には奪えないものだと思います。だから、今回中止とした台湾研修旅行の経費、次年度 1 年生から導入される予定の生徒一人一台端末の経費など多大な保護者負担をしてもらうことに対し、保護者の思いや願いを今一度考えないといけないと思っています。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第８号

令和３年５月１７日

○台湾

映画「千と千尋の神隠し」を思わせる台湾の九份⇒

台湾に2度ほど訪れたことがあることは、第7号で触れたところですが、今回はその時のことを少しお話ししたいと思います。

はじめての訪問は、25 年ほど前でした。台湾桃園国際空港（当時は蔣介石にちなみ中正国際空港）に降り立ち、高雄、知本温泉、花蓮、台北で泊まる4泊5日の台湾1周でした。植生だけでなく、高雄では台風が直撃したこともあって、北回帰線が通る緯度の低い南の国であることを実感しました。知本温泉では、持ち帰り用の温泉タオルがあり、各地の土産店などで日本語が通じる年配の方に何人もお会いしたことと合わせて、戦前日本が統治支配をしたことを痛感しました。

花蓮では、「阿美文化村」での民族舞踊ショーを鑑賞しました。台湾には、蔣介石率いる国民党とともに1949 年頃台湾に渡った人、清朝の時代に渡ってきた人、鄭成功で有名な明の末期に渡ってきた人、アミ族などもともと台湾に住んでいた人など一口に台湾人といっても多くの人がいることを知りました。ダイバーシティという言葉が一般化していますが、1990 年代はまだまだこれからでした。アイヌ民族からはじめて国会議員となった萱野氏により旧土人保護法の廃案が提案され、「アイヌ文化振興法」が制定されたのがこの頃だったと思います。「ダイバーシティ」が、多様性やそれを認め受容することに対して、それをどう活かすか個人レベルで考えること、最終的にはすべての人の利益になることを目指す考え方が「インクルージョン」だと捉えています。インクルージョン（inclusion）は直訳すると包括という意味です。人間の多様性を尊重し、障がいのある子どもも障がいのない子どもも共に教育を受けるインクルーシブ教育は、共生社会において最も大事な教育の一つです。

自ら中学校中退やトランスジェンダーであると公表した台湾のオードリー・タン氏は、2016 年に 35 歳という若さでデジタル化の担当大臣に任命され、台湾の新型コロナウイルスの感染対策を成功に導いた人物として世界中の注目を集め、「世界一受けたい授業」にも出演されました。このことが象徴するように、ダイバーシティ、インクルージョンが台湾で浸透しているのは、台湾には様々な人々がいることを認めてきたからかもしれません。台湾で出会う人はみんなやさしいと感じました。これは、多様な人を受け容れていく社会だからかもしれません。台湾では、心の知能指数といわれるEQが重視される国というのも納得できます。

写真の九份には2度目に訪れました。写真を見て、台湾はすべてがこんなところと思い込む人もいるかもしれません。訪れる前は私もその一人でした。日本では「忖度」という言葉にも象徴されるよう、相手の感情を読んで行動することがよくあります。それが思い込みであって、場合によっては偏見につながることもあります。それを防ぐためにもいろんなことに関心をもち、感じて、触れて、疑問をもち、考えていくことが大事だと思います。課題解決学習の本質はそこにあると思っています。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第９号

令和３年５月２１日

校長室だよりはＨＰに不定期連載しており、内容により全校あるいは学年単位で保護者あて配布もしています。

○台湾2

台北では古いエリアにある迪化街（できかがい）⇒

５月16日の山陰中央新報に「台湾からニーハオ！」という記事がありました。迪化街に雑貨店を開いた日本人女性が、たくましく暮らす台湾の人や、活気ある町の表情を伝える連載です。

その記事の中に、第8号で触れた「台湾の人はやさしい」という印象が私だけではないと思ったところがありました。作者は、「台湾人は情が厚く、自分が正しいと思うとちゅうちょなく突き進む」と評されています。台湾では、電車で人に席を譲るのはあたりまえで、作者の息子さんが新生児の頃、子連れで電車に乗った時ひと固まりの客が一斉に立ち上がったそうです。すぐ降りるからと断っても、「あんたのためじゃない」と腕まで引っ張って座らされたそうです。それは、自分にいい気分を充電して去っているようであっても、決して恩着せがましくなかったそうです。こうした「小さな善行」が、台湾では人から人へと伝染していき、見知らぬ人から受けた親切をどこかで返したくなっていくのだと書かれていました。

同じようなことをカナダで経験したことがあります。バンクーバーで路線バスに乗った時、年配の方が乗車してこられ、バスに乗っていたほとんどの人が一斉に立ち上がったのです。なにが起きたのかとびっくりしたと同時に、座っているのがほぼ自分だけという状況に気づくのにも時間がかかりました。

また、職場の有志で京都を旅した時のこと、満員のバスに子連れの妊婦さんが乗ってこられました。窓側に座っていた当時の私の上司（教育センター所長）が間髪入れず「こちらにどうぞ」と席を立たれました。通路側に座っていた私は状況把握が遅く席を立つのが遅れ、動く車内で妊婦さんを誘導するはめになりました。上司は、満員バスの中で誰か困っている人はいないか常に気働きをされていたのだと思います。

一畑電車で松江に通勤していたある日、電車がほぼ満員の時がありました。私の斜め前の乗客が荷物を置いていた座席スペースに無理やり座った若者がいました。私とは対面の位置に座った彼の荷物にはネームタグがついており、メッセージが添えてありました。「この子には障がいがあり発作を起こすことがあります。その際はちゅうちょせずに119番するか母親の携帯に連絡をください」という内容だったと思います。席を譲るべきなのはなにも年配の方や妊婦さんだけではないと知ると同時に、母親がそのメッセージを書いた思いを想像しました。

震災後に何度か東北を旅し、自然な気遣いに癒されたことがあります。荷物を抱え列車を待っていると、旅人が長旅で座れるようにという思いからか、列の先頭にいた高校生が自分の場所と交代しますと声をかけてくれたことがありました。旅行者であろう夫婦に席を譲る地元の年配の女性グループを目にしたこともありました。

震災直後に東北旅行に誘われ断ったことがあります。理由は、「震災のあった東北にお金を落としてあげないといけない。だから旅行に行こう」と誘われたからです。「してあげる、してもらう」感じに違和感を覚えたのです。障がい者に対する合理的配慮の提供が求められています。しかし、「してあげる、してもらう」関係での提供では意味がありません。共生社会においては、自然に心からお互いを応援したり支援したり助けたりする関係が構築できないといけないと思っています。助け合い、励まし合い、支え合い・・・合い（愛）のあふれる社会へ・・・

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第10号

令和３年５月24日

○感謝

地域の方が定期的に校長室へ生けに来てくださいます。感謝！⇒

5月17日に県高校総体の壮行式を本校で行いました。グラウンドでの実施を計画していましたが、雨天のため規模を縮小して体育館での実施となりました。

校長挨拶では、4つのK(言葉)をキーワードに話をしました(追加改変あり)。

まず「結果」。試合である限り結果が必ずつきます。結果を恐れることなく、これまで努力してきた成果を思う存分試合で発揮してもらいたい。

次に、「感動」。ひたむきにがんばる姿は周囲に感動を与えます。努力を重ねた日々と自分を信じ勝利をめざしてがんばって欲しい。勝利しても「謙虚」である「気遣い」も大事です･･･。

3つめに、「感謝」。これまで支え合った仲間に。そして保護者、部顧問など指導等に関わった方々、応援してくださる地域の方、県総体開催に尽力されている競技関係者などいろんな人に感謝の念をもってもらいたい。

最後に、「軌跡(過程)」。栄光(勝利)は、伝統をつくってこられたOBや伝統を受け継ぐ後輩、また感謝すべき人たちに送るものかもしれません。勝負がつく瞬間は一瞬です。その一瞬の喜びのために日夜努力してきたと思います。勝利の瞬間であろうが、負けて試合が終わった瞬間であろうが、一生懸命がんばったものにしか見えない風景があります。その風景は、努力した軌跡と、そこで培ってきたものがあればあるほど違って見えるはずです。その一瞬見える風景が、これからの将来の支えになると思うので、しっかりその風景を見てきて欲しい。

着任式などで話をしましたが、50歳になってから隠岐の島ウルトラマラソンなどいくつかのマラソン大会に出ています。沿道での応援や大会の関係者･ボランティアの人たちへの感謝の気持ちから、ゴール後には振り返って脱帽しお礼の挨拶(お辞儀)をするようにしています。しかし、するようにしているくらいだから、忘れることもあります。忘れた時は、どんなにゴールまでがんばった自分がいても、自分しか見えてなかったことに反省です。

隠岐の島ウルトラマラソンは、感動が駆け巡って島を一周します。最後の 10km、空港のある岬付近になると、沿道から「お帰りなさい」と声がかかります。この言葉一つで、疲労がやわらぎ、気持ちが暖かくなります。言葉で返す元気がなく、会釈で応えるのですが、心の中では「ただいま」「ありがとうございます」と言っています。

今、シトラスリボン運動が広がりつつあります。私も、ネームタグにつくって入れています。これは、コロナ禍で生まれた差別、偏見を耳にした愛媛の有志がはじめたプロジェクトです。 ホームページによると、シトラス色のリボンや専用ロゴを身につけて、「ただいま」「おかえり」の気持ちを表す活動で、 リボンやロゴで表現する3つの輪は、地域と家庭と職場(もしくは学校)、とのことです。 「ただいま」「おかえり」と言いあえるまちなら、安心して検査を受けることができ、ひいては感染拡大を防ぐことにつながるという思いからはじまった運動とのことです。

総体に出場し、いろんな感情や思いを抱えて帰って来る選手に「おかえり」とあたたかく迎える家庭、地域、学校。「ただいま」「ありがとう」と言う選手たち。帰るところがあるからがんばれる。学校においては、それが安心安全な学校、認め合い、励まし合う学校、そんな合いのあふれる学校の姿かなと思っています。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第11号

令和３年６月８日

○晴耕雨読

5/11 分校の農業体験（田植え）の様子⇒

図書館だよりの発行にあわせ、本・読書について書いてみました。

高校時代、一番成績が振るわず苦手だったのが国語でした。大学受験に失敗した時に、１年間はニュース以外のテレビ番組は見ず、その時間を読書に充てる誓いを立てました。といっても、そう簡単に本を好きになれるものでもありません。そこで、小学生のころ読んで面白かった『ぼくのおじさん』の著者北杜夫の本を読むことにしました。なかでも読み入ったのが『どくとるまんぼう青春記』でした。戦中戦後の過酷な時代の学生生活の話なのに、なぜかこの小説を読み終えた時には、大学生になりたいという気持ちが自分の中で強くなっていたことを覚えています。これがきっかけで、北杜夫の著書をすべて読みました。夏頃には、受験勉強を怠ける口実に本を読むくらいになっていました。そうなってくると、他の著者・著書にも興味が出始め、当時難解な評論文の出題で受験生を悩ました小林秀雄をはじめ、近現代の作家の本を週1～2冊のペースで読みました。『アンネの日記』では、将来を夢見れることの幸せを痛感しました。新聞に連載される小説も読み、そのついでに社説や天声人語なども習慣として読むようになっていました。

北杜夫氏は10年ほど前に亡くなりました。その報を受けて、東京に行った折に、自宅（*住所非公開）付近を散策しました。再三出てくる自宅やその近隣の空気を肌で感じたいと思ったからです。散策しながら、著書を通じて、自分の生き方や考え方を、著者と、そして自分自身と対話していたのだと感じました。将来を思い悩んだ受験の時期だからこそ、いろんな先人と対話したいと思い、読書にはまったのだとあらためて思いました。

その数年前、公開されている司馬遼太郎の自宅（記念館）に行きました。20代～40代は、歴史関係の本を読み漁ったのですが、彼の著書は避けてきました。司馬史観とも言われる彼の歴史観に引っ張られてはいけないと思ったからです。しかし、1冊読んだだけで、自分の歴史観のなさを思い知りました。歴史を知ることに重きをおき、一番大事な歴史から学び、そして考えることをしていなかったのです。

ここ数年は、柳美里さんの私小説をかなり読みました。人間のどろどろした部分が多いのですが、そのことで自分の内面のさらに深層とも向き合えた気がします。最近『JR上野駅公園口』が全米図書賞を受賞されたことでも話題になりました。彼女は、東日本大震災を契機に、福島第一原子力発電所に近い南相馬市に移住されています。私も震災後に行きましたが、あの時の光景は忘れることができません。

人は、なにかの解決策を求めて本を読むことがあります。でも、解決策をその本の中に見つけるのではなく、本を通して自分の中に見つけるものだと思います。

これからも、いろんな先人と対話するため、本を読み、そしてその町に出かけていければと思います。生徒のみなさんには、まずは身近な地域の歴史的な場所に行くことをおすすめします。手前味噌ですが、そんな時に（確か分校の）着任式でお話した『島根県の歴史散歩』を参考にしてもらえれば幸いです（笑）。

なお、ここで触れた本などを図書館で紹介するコーナー等を今後つくってもらう予定にしています。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第12号

令和３年６月１５日

○思いを胸に・・・

島根県高校総体の様子⇒

昨年度中止になった高校総体が、今年度は開催され無事終わりました。大会運営をされた関係者のみなさまをはじめ、開催を信じて日々努力してきた選手のみなさん、それを支えてきた指導者や保護者、そして地域の方々に拍手と感謝の気持ちを送りたいと思います。三刀屋高校及び掛合分校が出場する競技の会場に、剣道のオンライン中継も含めすべて行くことができました。三刀屋高校の校歌の最後に、「われらの三高ここにありと　ひとしくともに誇るべし」とあります。三高プライド、カケコープライドを胸に、仲間を信じ、これまでの自分の努力を信じて、ひたむきに精一杯最後の最後まで全力で試合をする選手たちに胸が熱くなりました。3年生のみなさん、3年間本当におつかれさまでした。

自分ごとですが、高校総体後の6月中旬に、ここ4～5年参加してきた隠岐の島ウルトラマラソンが昨年につづき今年も中止になりました。開催を信じてこれまでトレーニングしてきたので、とても残念です。実は、昨年の今頃は走る気力も失っていました。再度やる気を起こすきっかけをくれたのは隠岐の高校生たちでした。中止の決定からしばらくして、隠岐の島町からカレンダーが送られてきたのです。カレンダーには、7月の「汽船場でのスタート風景」を皮切りに、10キロごとの写真で作成されており、6月はゴールシーンになっていました。その日、その月に走った距離も書けるようになっていました。ランニングのアドバイスや調整方法なども大会に向けて月ごとに段階的に書かれていました。この発案をしたのが隠岐の高校生で、町と協力して作成し、エントリーした選手全員に無料で送ったものだと知りました。その思いがこもったカレンダーに胸が熱くなり、トレーニングを再開して、この気持ちに応えようと思ったのです。土日を含めた休日に走るだけですが、走らなかった休日はこの1年間で数日しかありません。それまでは、なにかと理由をつけて走らない休日もありましたが、この1年は違いました。隠岐の高校生や隠岐の人たちの思いに応えようと決意が強くなったからだと思います。

右下の写真は、ゴールまで5キロほどの岬の道路で、ここに来ると眼前（奥）に西郷湾がきれいに見えてきます。ここまでがんばったご褒美の景色です。5月のマラソンカレンダー（左上）にもなっています。隠岐に単身赴任していた時のランニングコース上にあり、隠岐でもっとも好きな風景の一つで、それを知る友人が町のカレンダーの風景写真に推薦し採用されたこともありました。この写真は、中止となった開催日の、おそらく私が通過したであろう夕方時刻に撮影されたものです。隠岐に初任で赴任した時の教え子が、「来年の今頃ここであいましょう」と送ってきてくれました。残念ながら、それは来年になりそうです。この岬では、前にも書きましたが、沿道の方々が、「おかえり」「よくがんばったね」と声をかけてくれます。スタートから公設だけでなく私設のエイド（給水給食所）がたくさんあるのですが、つかれた体を気遣って、岬では甘いコーヒーやおにぎりなどランナーを思って色とりどりの料理や飲み物、果物がふるまわれます。ここで食べた甘い卵焼きの味は今でも忘れません。手にゴミを持っていると受け取ってくれます。コールドスプレーを無償でいろんな人が渡してきます。気遣いの嵐です。これが延々と50キロ、100キロ続きます。いろんな人に支えられて生きていること、頑張り続けていることを実感する道のりです。

総体を終えた選手も今同じ思いではないでしょうか。思いを胸に次に向かってがんばって欲しいと思います。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

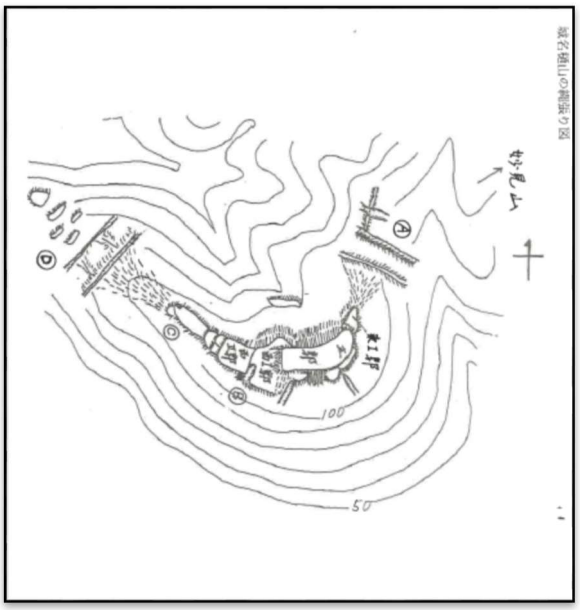
第13号

令和３年６月２２日

○きなひ山

三刀屋高校の出入口から三刀屋城址公園を臨む⇒

夕方家路につくため学校の坂を下ると、三刀屋城址公園の看板が見えてきます。さらに国道54号線を宍道方面へ走ると、雲南市役所の裏山の頂上付近に「きなひ山」の文字が見えてきます。『出雲風土記』に地名が出てくる城名樋山（きなひ山）は、戦国期の山城の跡で今は公園になっています。



かれこれ20年以上も前になりますが、島根県内の中近世城郭分布調査に関わる研修会で、きなひ山を訪れたことがありました。その時描いた縄張り図（城郭遺構図）が左の図です。なにぶんほぼ素人であったので正確性には欠けますが、素人でも遺構がわかりやすく描きやすかったのを覚えています。他の調査員の方が出雲部では一級の城郭遺構であると言われたこともうなずけました。図でA～Dとしている地点が堀や堀切を確認できるところです。堀と言っても松江城のような水堀ではありません。大きな凹みのようなものです。『木次町誌』を見ると、城跡には馬乗馬場や井戸などの跡があるとしています。

研修ではありましたが、当時の木次町教育委員会から、①城名樋山が風土記に見える城名樋山と同じかどうか知りたい。②城郭遺構の範囲を明確にすることと合わせ、遊歩道をつける際の配慮点を知りたい。の2点の要望がありました。斐伊小学校の全面改築にあわせて城名樋山を史跡公園として整備する計画があってのことだったと記憶しています。ちなみに、『出雲風土記』には、その昔、大穴持命が八十神を征伐するために城名樋山に城を築いたと出てきます。

城名樋山城は、戦国期の佐世氏の支城であったと推測されます。山陰の戦国大名の尼子氏に与していた佐世氏は、山口の戦国大名であった大内氏が 1542 年出雲に侵攻した際、尼子方として戦いました。対岸の尼子十旗（尼子氏にとって重要な10の城）に数えられる三刀屋城の城主であった三刀屋氏は、途中で大内方となっています（その後再び尼子方へ）。ちなみに、出雲侵攻は失敗し大内氏は敗走しました。その20年後、毛利氏が出雲に侵攻した際には、佐世氏も三刀屋氏も毛利方として戦い、尼子氏は滅亡しました。

城名樋山の地理的位置を考えると、国道54号線が斐伊川と交錯する地点でもあり、三刀屋川もここで合流するなど、交通の要衝に位置しています。木次商人が斐伊川水運などを利用して活躍していたことも考え合わせると、ここは流通の要衝であったと推察されます。そのことと雲南市役所の立地も関係するかもしれません。

中学校説明会で、「三刀屋木次ICが木次三刀屋ICでないのはなぜ？」という話をしています。学びは、疑問を抱く感性と、それを深める探究力が大事で、その往還が学びの推進力となり、主体性も養われるという話をするためです。そうした疑問をもつことを、身近なところからはじめるのが地域学習、より深化させていくのが地域課題解決学習と思っています。先日、本校1年生の「未来創造」で、「なぜ焼き鯖が雲南名物になったか」を扱っていました。こうした学習を通して、探究力をつけ、生徒の感性が豊かになることを期待しています。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第14号

令和３年６月２３日

○たたら侍

春季写真コンクール分校生徒出品写真「快晴」⇒

オープンセットが雲南につくられ、映画たたら侍が撮影されたのは記憶に新しいところです。私は、たたら製鉄によりつくられた鉄の運搬・商売がどのように描かれるのかに関心を寄せて観ました。劇中、鉄を馬に乗せて旅立ち盗賊に会うシーンがあります。当時は途中から斐伊川を使って杵築（大社）へ、さらに日御碕の宇竜から若狭まで船で運び、鯖街道を陸送したのち、琵琶湖を使って近江坂本などに陸揚げして京などに運び込まれていたようです。商人がたたらを求めて村まで来る話になっていましたが、このルートで来たのでしょう。映画でも船のシーンがありました。

水運・海運が略奪の可能性が低く重いものも大量運搬できますが、時化等で海に消える危険性があります。

鉄が重要品であったことは言うまでもなく、その生産と流通を掌握することは戦国期の領主にとってとても重要でした。支配、統制、領有・・戦国期はその形態が複雑です。戦国期の山陰の流通を調べている中で、未解明なことが多かった掛合や私が住む平田の多賀氏を調べたことがありました。

『出雲国風土記』によると、飯石郡には7つの郷がありました。熊谷郷、三屋郷（三刀屋町三刀屋など）、飯石郷（三刀屋町多久和など）、多禰郷（掛合町多根、松笠、掛合、入間など）、須佐郷、波多郷（掛合町波多など）、来嶋郷です。分校のある多禰郷は、中心が現在の多禰（多根）から掛合に移ったことによるのか、戦国期にはしだいに掛合郷と呼ばれるようになりました。この地を掛合多賀氏や広島から進出してきた日倉山城の多賀山氏が治めていたようです。『掛合町誌』によれば、以前この日倉山城主を多賀山氏ではなく、多賀氏と記した文献が出たため、多賀氏と混同が生じたようです。そのためか、未解明なことが多くなったようです。

多賀氏の所領あるいは権益を有する地に目を向けて見ると、多禰郷、多久和郷、立原（加茂）、平田（出雲）、長田西郷（松江）・赤江郷（安来）などで、すべて流通を考える上で大事なところです。山陰・山陽を結ぶ出雲備後路を通り多禰郷から多久和郷を抜けると、斐伊川と交錯する結節点に出ます。ここには来次（木次）市場がありました。そこを抜けると加茂町立原付近を通り宍道に出ます。宍道湖の西の結節点が平田であり、東の結節点が長田となります。また、飯梨川（旧富田川）河口にある赤江郷は、尼子氏の居城である富田城と中海とを結ぶ交通の要衝にあたり、尼子氏や有力領主にとって重要な地でした。そのためか、多賀氏は反尼子勢力のような存在だったようです。

掛合の多賀氏は、その後出雲の塩冶氏とともに尼子氏に敵対して没落。離反し没落した掛合の多賀氏と両翼をなす平田の多賀氏も、おそらく同じ頃に尼子氏から離反したと思われます。多賀山氏は、1442 年の大内氏の出雲侵攻の時に終始大内方として戦うなど、これまた反尼子勢力だったようです。

その後の平田では、商人の記録として、次のような史料が残っています。「永禄12年（1569 年）平田の目代（代官）等は、平田商人たちは三刀屋に出向いて商売をしているが、従来からの約束通り来次（木次）には行っていないのに、来次（木次）商人が逆に平田の海辺の村に来て商売をして困っているので、杵築（大社）の商人連合に調停を申し出た」というものです。このやりとりについて専門家は、「杵築商人連合が広域な地域経済圏の中心に位置して平田商人を統制下においていたこと。そして逆に来次商人は、そうした枠組みから離脱し成長していこうとしていた」ことがわかるとされています。

たたら侍や史跡もそんな歴史的背景を知った上で見ると、また違ったように見えるのではないでしょうか・・・。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第15号

令和３年７月５日

○4度目

春季写真コンクール分校生徒出品写真「木次町桜土手」⇒

１学期期末試験が終わりました。昨年度は臨時休校や総体中止など艱難辛苦とも言うべき日々でした。今年度は延期等が若干あったものの教育活動がほぼ実施できたこと、そのために感染症対策等に取り組んだ生徒、保護者、教職員、地域のみなさまに感謝するばかりです。本当にありがとうございました。

さて、マラソンに50歳になって挑戦しはじめたことは前にもお話しました。そのきっかけは隠岐養護学校の生徒たちのがんばりでした。自分がなにかに挑戦することで、なにかのメッセージになれば･･･そんな思いからでした。

実は、それまでに長距離を3度失敗というか、断念したことがあります。最初は大学4回生の時。大学から室戸岬まで夜通し約90キロを歩き通すイベント「室戸貫歩」でした。挑戦したい気持ちはあったものの、卒業論文の締め切りが近いことを自分自身への言い訳に参加申し込みをしませんでした。同じアパートの友人が参加したので、深夜差し入れをもって約40キロ地点の（阪神タイガースのキャンプ地で有名だった）安芸市まで行きました。がんばっている友人や他の学生の姿を目の当たりにして、逃げた自分が恥ずかしくなり、衝動的にそこから歩きました。深夜0時過ぎのことだったと思います。ゴールの室戸岬の中岡慎太郎像付近に着いたのがお昼前。その時の光景は今でも思い出すことがあります。なぜか道中水戸黄門を口ずさんでいました。しかし、思い出すたびにこみ上げてくるのは、なぜスタート地点に立たなかったのかという、逃げた自分への後悔の念です。

その後教員になり母校の女子ソフトテニス部顧問となったある年、地元で鳥取県の大山寺から一夜にして平田の鰐淵寺まで弁慶が釣り鐘を運んだという伝説をもとにした弁慶ウォークというイベントが開催されました。夜出発して寝ずに歩き通し、翌日夕方頃までかかる 100 キロの道程です。今度は逃げずにスタートラインに立とうと、女子部員も誘って申し込みをしました。日本海テレビが日テレ24時間テレビとタイアップして、女子ソフトテニス部を24時間追い続けることになり、途中途中でインタビューをされることになりました。ある意味背水の陣です。しかし･･･約90キロ地点の自宅付近で足が動かなくなりリタイヤしました。途中途中でのインタビューは 24 時間テレビの番組中に生放送されたものの、翌日ニュースで放映された総集編では、顧問は最初からいなかった設定で編集されていました。ちなみに、女子部員は全員完歩。あと2時間ほどががんばれませんでした･･･。

翌年再挑戦しましたが、テレビ中継もなく部員も誘わず張りがなかったからか、平田どころか東出雲でリタイヤ。これで3回連続自分に負けたことになりました。このイベントはその後大人や学生がサポートして体育館等に泊まりながら歩く小学生向けのイベントになりました。それに長女が参加し、見事完歩しました。完歩したものだけが見せる表情に、自分の弱さを重ね合わせ、いつか克服したいと思い続け 50 歳を迎えた時に転機がありました。

隠岐養護学校では、隠岐の島ウルトラマラソンの壮行式をします。学校には大きな隠岐の島の地図が掲示され、スタート地点に出場する教職員の顔写真が貼られます。さらにボランティアとして参加する生徒たちや教職員の顔写真も担当する給水地点に貼られます。隠岐の島ウルトラマラソンでは、小中学生や隠岐養護学校の生徒たちが割り当てられたランナーに激励の手紙を書き、それが参加証と一緒に送られます。お礼の手紙を送ってきたり、学校にお礼に言いに来たりするランナーもいます。そんな手紙や光景が地図に花を添えます。

私は、その地図の縮小版をつくり、ポケットに忍ばせて 50 キロ走りました。「あの給水所にはあの生徒がいる。そこまでは走らないと･･･」そんな連続で気づいたらゴールしていました。その時から走る時はいつも「克己」と大きく文字の入ったTシャツを着て走っています。ゴールした瞬間、それはやっと己に克てた瞬間でした。ウルトラマラソン完走者に贈られるメダルは毎回色が違い、7回完走すると虹色レインボーとなります。50 キロをあと3回、通算7回完走してレインボーメダルとなったら、次は未知の 100 キロの道程に挑戦したいと思っています。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第16号

令和３年７月５日

○花火

新潟県長岡市の花火大会の風景⇒

毎年8月初旬に開催される長岡の大花火大会が2年連続中止となりました。そもそも花火は慰霊や疫病退散が目的の催事だったことを思うと、コロナ禍にあって、それすらできないことが残念でなりません。ですが、夏に三刀屋高校の校地内を打ち上げ場所に花火大会が開催されることになりそうです。秋には研修旅行や受験旅行に普通に行けることを願うばかりです。

ちなみに写真の長岡の大花火大会をまだ観に行ったことはありません。長岡駅を降りたところにあるアオーレ長岡シアターの3D映像で観て、花火大会を観た気になったのが6年ほど前のことです。そもそも長岡に行った目的は、雁木の街並みと山本五十六記念館や山本五十六の生家を訪ねることでした。

山本五十六は、米100俵の話で有名な長岡の地で生まれた、真珠湾攻撃を計画した旧日本海軍連合艦隊司令長官であった軍人です。10年ほど前の映画では、役所広司が演じました。

米100俵の話とは、戊辰戦争で薩長連合軍に大敗した長岡藩の人たちが、食べるものにも困っているのを見かねた他藩から義援米として送られた米100俵を、「どんな苦境にあっても教育をおろそかにできない」として学校設立にあてた話です。長岡藩の生活信条で、山本五十六の座右の銘であった「常在戦場」。この言葉は、日頃から無駄を省き蓄財に心がける気風、創意工夫と斬新な行動をする気質をつくったと言われています。その精神が米100俵の精神につながっているのだと思います。気風をつくる言葉、福島県の会津若松藩で言えば、「一、卑怯な振舞をしてはなりませぬ。一、弱い者をいじめてはなりませぬ･･･ならぬことはならぬものです」などで有名な什(じゅう)の掟でしょうか。雲南で言えば、永井隆博士の言葉、「如己愛人」でしょうか･･･

さて、山本五十六は、父親が56歳の時に六男として生まれました。私が今56歳ということもあり、あらためて彼の著書を紐解いてみました。彼は多くの言葉を残しています。その中でも特に有名なのが次の言葉です。

「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、誉めてやらねば、人は動かじ」

人材育成(教育)として、「まずは先生･リーダーがやってみせる。次は説明して理解させる。そしてやらせてみる。そこでできたことはきちんとほめる。そうでないと人は動かない。」という考え方です。ただし、ほめるというのは、おだてるということではなく、共に成功や成長を喜ぶということです。

これには続きがあり、「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。」

「やっている姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。」

あさって7月7日はセタです。日本史では、この日を日中戦争のはじまりとなる盧溝橋事件の日として教えます。5月9日の国恥記念日や9月18日の満州事変勃発の日など、加害者となった歴史的な日を覚えている日本人は多くないと思います。今から10年以上前に盧溝橋に行ったことがあります。今は平和な風景の中にあるその橋で、旧日本軍が起こした事件を発端に多くの人が亡くなったことに思うと身につまされました。

平和を愛した永井隆博士ゆかりの地にある高校の生徒として、平和の意味をあらためて考えてみる夏にしてもらいたいと思っています。8月9日が長崎に原爆が投下された日です。

平和が続いた江戸時代に、火薬の平和の使い道として発達した花火。山本五十六のふるさと長岡で花火大会が開かれていることは、決して偶然ではないと考えています。海軍軍縮条約締結への努力など、軍人の立場で世界平和と日本の安全に働いた人との解釈もされている人だからです。･･･「この身滅すべし。この志(平和の希求)奪うべからず。」･･･反対することで命を狙われたとしても三国同盟に反対するという彼の覚悟を書いた決意文の言葉です。「人間は自己の力ですべてをやらねばならぬ、人にたよってはならぬ。」･･･

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第17号

令和３年７月９日

○長崎と永井隆博士

長崎女子高の龍踊部の演舞⇒

新型コロナウイルス感染症が全国的に拡大する前の最後の旅行先が長崎でした。この年、勤務していた教育センターの全国大会が長崎であったので、約25年前に友人の結婚式で訪れて以来久しぶりに2度も訪れました。

全国大会のレセプションでは、長崎女子高の龍踊部の舞が披露されました。長崎くんちの龍踊りに、女子が舞うことへの異論もある中、熱心な取り組みからやがて地域から認められた伝統芸能を伝える部活動で、今は一番部員数が多いそうです。

ちなみに友人の結婚式は、友人がカトリック信者であったので、平和公園からほど近い浦上天主堂（右写真）でありました。司祭が執り行い、聖歌隊も登場するなど、めったに経験できない式でした。

観光で修学旅行生等が行くのは、グラバー園の入り口近くにある国宝の大浦天主堂（左写真）です。幕末の開港にともない建設されました。隠れキリシタン達が信仰の告白をプティジャン神父にしたことで、彼らが江戸時代に信仰を続けていたことがわかった有名な教会です。開国後もキリスト教は禁止され、明治初期まで信仰は犯罪行為でした。ちなみに、遠藤周作の著書で映画化もされた『沈黙』は、島原の乱後の長崎での激しいキリシタン弾圧を描いています。

知ってのとおり、キリスト教はフラシスコ・ザビエルによって 1549 年に日本に伝わりました。山口市と鹿児島市にザビエル（記念）聖堂があります。残念ながら、山口市の聖堂は 30 年前に焼失して、その後再建されました。

浦上天主堂は、爆心地に近いことから、原爆で倒壊し、戦後再建されたものです。塔の部分が吹き飛び、そばを流れる小川に残ったままになっています。そこから再建後の浦上天主堂を見上げると、いかに爆風がすさまじいものだったかわかります。恒久平和と隣人愛の精神を発信し続けた永井隆博士の手記「長崎の鐘」は、古関裕而により歌になりましたが、そのモチーフになった鐘がそこから掘り起こされた浦上天主堂の鐘です。原爆の直撃を受けましたが、再建後の塔に戻され、今も荘厳な音を響かせています。

昔友人が浦上天主堂にほど近い公園で話したことが今でも忘れません。「ここが公園になっているのは、原爆で亡くなった方を荼毘に付したからで、住宅地にはできない。」というものです。永井隆博士の病室兼書斎である「如己堂」は、この近くだったと思います。三刀屋の永井隆記念館には複製された如己堂があります。

浦上天主堂の凄惨な歴史は、原爆だけではありません。明治初期の浦上四番崩れもその一つです。浦上四番崩れとは、江戸末期から明治時代初期にかけて起きた大規模な隠れキリシタンの摘発事件です。明治政府は、浦上信徒らを、津和野藩や萩藩に配流にし、各藩では信仰を捨てさせるために激しい拷問が行われました。浦上天主堂の境内の一角には、毛利氏の山口県萩藩に配流された信徒らが正座させられ、棄教を迫られた「拷問石」が置かれています。亀井氏の津和野藩には、153名のキリシタンが送り込まれて迫害され、激しい拷問の末 36 名の信徒が殉教、つまり亡くなりました。身動き取れないほど小さな「三尺牢（ろう）」に閉じ込めたり、氷の張った池に投げ込んだりする激しい拷問が行われましたが、このことを描いた小説が、永井隆博士の絶筆となった『乙女坂』です。カトリック津和野教会には、永井隆博士の原稿が展示されています。また、拷問を受けた場所には乙女坂マリア聖堂が建てられており、壁画には迫害の場面が描かれています。

研修旅行などを通じて永井隆博士の足跡に触れ、平和について考えることができればと思っています。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第18号

令和３年７月２１日

○終業式(本校･分校では話を一部変えています。)

アスパルに設置されたボランティアセンター⇒

このたびの豪雨により被災されたみなさまに心よりお見舞い申し上げます。未だ不便な生活をしているご家庭もあると承知しています。一日も早い復旧を願うとともに、一人一人ができることで協力できればと思っています。学校としては、今回のことを教訓として活かしていくとともに、一日でも早く通常の学校生活が取り戻せるようつとめていきます。また、そのために全教職員、全校生徒が協力し合っていければと思っています。

大雨の翌日は本校･分校とも休校でしたが、野球部の寮生たちが、ボランティアで被災した住宅の片付けにあたったというニュースがNHKで放送されました。このニュースを見て、本校校歌の一節「われらの三高ここにありと。ひとしくともに誇るべし。」の気持ちになった人もいると思います。JRC部も募金を始めました。ボランティアセンターを通じて活動した生徒もいます。こうした行動は、生徒一人一人が普段から行動したり、思ったり、感じたりしていることの延長線上にあり、保護者はもちろん、学校関係者や地域の方々への感謝の気持ちを持ちながら学業や諸活動に取り組み、その活動や元気のいい挨拶で町を明るくする本校･分校生徒を代表しての行動であったと思っています。昨年度も部活動単位や個人で地域のボランティアに従事していたと聞いています。

今回ふと10年ほど前に勤務していた学校での出来事を思い出しました。1月の大雪となったある日の早朝、学校に行くと何人かの生徒達が昇降口やそこまでの坂道の雪かきをしていました。当時3年学年主任をしていたのですが、よく見るとそれは推薦で合格した生徒達でした。「これからセンター試験に向かう仲間のためにできることを考えた結果、本番前にケガをしないようにと思って誘い合ってきました。」と話してくれました。この年、後期日程の直前に東日本大震災が起きました。その翌日多くの3年生が、卒業式後にもかかわらず学校に来て、「後期日程を受けられるかどうかわからず不安な仲間のためにできることはほとんどないが、街頭に出て募金活動することで誰かの力になりたい」と言ってきました。雨の中、急ごしらえの募金箱を持って町に出て行った生徒達の姿を思い出します。ちなみに、この年の進学成績は最終的に近年にない良いものでした。

こうした行動は、昨年香港の民主化運動で有名になった「水になれ」という言葉のような行動でした。みんなが水のように一体となって、それぞれがかわるがわるリーダーになる主体的行動者の集団と理解しています。

ボランティアには目の前の人のためのもの、献血や募金のように見知らぬ誰かのためのもの、また未来の人のためのものなどがあります。それは「恩送り」となって広がっていきます。

ドラゴン桜を観た人もいると思います。ドラマの中で、桜木先生が、東大入試に出題された問題を例に、自分中心的な視点しかない人間は東大では求めていないと明言していました。広い視野を持って多角的な視点から物事を考えることは、他者を大事にすることにも通じているということだと思います。ドラマでは、自己中心的ですぐ人を見下した言動をするある生徒が、入試本番の大事な場面で、友人を助けて右手をけがしてしまい、そのことが原因の一つとなり不合格になりました。桜木先生はその生徒に、そして生徒自身も絶対に来年は合格する、できると断言していました。ドラマ全体でも東大入試に挑む生徒達が、チームとなって支え合う場面が何度も出てきます。桜木先生は、何のために東大に行くのかも幾度となく問いかけていました。

まずは一歩を踏み出す、挑戦する勇気。そして助け合いや他者を気遣う意識を持つこと。なにより自分自身が確かな、大きな志を持つことができていれば、夢の実現も自ずと見えてくるということではないでしょうか。

「小さな挑戦、小さな善行、確かな（大きな）志」の意味もそこにあります。

3 年生にとっては就職、進学に向けて大事な夏です。1，2 年生にとっても学業、部活動などで主体性を身につけいく大事な時期です。有意義な夏休みにしてください。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第１９号

令和３年８月２３日

○始業式講話抜粋 「3K(感動･感謝･気遣い)」　日野原先生著書⇒

短い夏休みが終わり、2学期が始まりました。節目としての心と頭の整理が十分にできましたでしょうか。気持ちを引き締めて、2学期をスタートしてほしいと思います。今日は、私の印象に残っている言葉を2つ紹介します。

一つ目は、ある数学の先生の言葉、

「1 の 365 乗は 1　0.99 の 365 乗は 0.026　1.01 の 365 乗は 37.78」です。

普通のことを 365 日やっても同じ。ほんの少しなまけ続けると大きな損失になり、ほんの少しのがんばりを続けると大きな成果がある、という事でしょうか。もちろん日々こつこつと続けることは大切です。言われたことをきちんとやり切ることも当たり前のことです。日々、少し工夫して、少し自分の殻を破って努力すると大きな違いとなるということです。主体的であることも大事。それが、合い言葉である**「小さな挑戦」**に込めた意味の一つです。

二つ目の言葉は、日野原重明先生の言葉です。先生は 105 歳で亡くなるまで生涯現役の内科医として診療にあたられただけでなく、100 歳を過ぎても年間 100 回以上の講演や小学校で「いのちの授業」をされ、多くの本も執筆されました。ここではある小学校での「いのちの授業」での言葉を紹介します。

> 命はどこにありますか？　心臓ではありません。 心臓は大切な臓器だけど血液を送るポンプで命ではありません。 命は感じるもので、目には見えません。 目に見えないもので大切なものはたくさんあります。空気、酸素、愛情、思いやり･･･本当に大切なものは目に見えません。 命は君たちが持っている時間です。 死んだら自分で使える時間もなくなってします。 一度しかない自分の時間、命をどのように使うかしっかり考えながら生きてほしい。 さらに、その命を<u>自分以外の何かのために使う</u>ことを学んでほしい。

この言葉を聞いて何を感じ、何を思いましたか。

自分の命、与えられた時間を大切にしているかあらためて考えてみてください。

そして自分が自分以外の命、時間のために何ができるかも併せて考えてみてください。それは小さな思いやり、気遣いでもいいのです。気持ちが大事です。それが**「小さな善行」**に込めた意味の一つでもあります。

人は、誇り高くないと人に助けを求めないと聞いたことがあります。誇り高いというのは、弱い部分がないという意味ではなく、**「確かな(大きな)志」**を胸に、弱い部分を隠さず、そのことを課題として努力できることだと思っています。弱い部分を隠すうちはそのことを自分自身が受け入れていないので、努力をおこたりがちになり、また自己中心的にもなりがちです。できないことを人のせいにすることもあります。そこでは感謝や気遣いの気持ちが薄れがちです。ちなみに、弱い部分を各自が認識し、安心して見せ合える集団では、互いが励まし助け合うので、いじめもないと思います。それはチームとしても、個人としても成長する集団です。

池江選手の復帰、オリンピックでの泳ぎに感動したことは記憶に新しいところです。池江選手が闘病のつらさを発信できたのは、彼女には確かで大きな志があったからだと思っています。自暴自棄にならず、闘い努力するとともに、助けや支援を素直に求められる人だからだと思います。活躍する選手ほど、インタビューで感謝の言葉を述べます。出した結果が、決して自分だけの力や努力で達成できたものではないと心から思っているからだと思います。オリンピックの野球の日本代表は、観客のいないスタンドに向かって並んで一礼しました。

感動、感謝、気遣いの３Ｋはセットのような気がします。

２学期は、勉強や部活動、学校行事などに集中して取り組むことができる学期です。全員が3Kと三高(掛高)プライドを胸に全力で走りましょう！　皆さんの飛躍と成長を願って始業式の話とします。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第20号

令和３年８月２３日

○風呂敷

風呂敷のイメージ⇒

長崎の浦上天主堂で結婚式に参列したことがあると 18 号で触れました。この結婚式での浦上天主堂の司祭のお話しがとても心に残ったので今回紹介します。

お話のテーマは風呂敷でした。風呂敷を日常生活の中で目にすることはあまりなくなりました。簡単に表現すると巨大なハンカチのようなもので、物を包み持ち運んだりするためのものです。泥棒のイメージというと、盗んだものを唐草模様の風呂敷に包み背中を背負っている泥棒という人もいると思います。

話は、夫婦円満の秘訣でした。要旨は次の通りです。

「心というものは、その時々の感情によって、いろんな形となります。怒りであれば□や△、とげとげした形、岩のような形。幸せであれば○。弱いときにはスライムのように形にならないこともあります。一方の気持ちが△で、片方の気持ちが○であれば、合わせた時に隙間ができます。いくら大きな○の気持ちで、沈んでいる△の気持ちを包んでも、隙間はいっぱいできます。そうすると、その隙間がわかってもらえていない感情となり、イライラしてくるものです。そんな時に、風呂敷のような心で包み込めば、相手がどんな形の心であっても隙間はできません。また、相手の気持ちやぬくもりが直接伝わってきます。」

ではどうやったら風呂敷のような心を持てるのでしょうか。そこの話はされたけど覚えていないのか、されなかったか残念ながら記憶がありません。

結婚式での話ではないですが、関連して山嵐の抱擁(「ヤマアラシのジレンマ」)という話があります。

「二匹のヤマアラシが体を温めようとして近づくが、とげで傷つけ合ってしまう。離れると寒い。ヤマアラシは結局、傷つかなくてすむ、互いにいちばん近い所に落ち着く。」というものです。

人間も同じではないでしょうか。互いに、それ以上は踏み込んではいけない領域があります。それを認め合うことから、真の協調関係･信頼関係が生まれます。夫婦関係に置き換えれば、いつも風呂敷の気持ちで、それを上から目線で相手を包み込んであげようと思うとうまくいかないこともあるのではないでしょうか。

風呂敷の心とは、あくまでもお互いが対等の関係であり、相手にあわせて自分の心や接する態度を、相手を気遣って変えていくことが大事で、その上で優しく包みこむ気持ちを持つことだと今は思っています。

そう言えば、小説「坊ちゃん」に、昔の三刀屋高校と同じ旧制中学の数学教師の山嵐が出てきます。正義派で、坊っちゃんに協力して,ずるがしこい教頭の赤シャツ,同僚の野だいこをこらしめます。この山嵐のネーミングは、坊ちゃんとの心理的距離を表現したものかもしれません･･･。(実際は柔道の技に由来しているようです。)

ちなみに、風呂敷に少々の穴があったとしても、よほど小さな物でなければ風呂敷からこぼれることはありません。ですが、人は風呂敷やハンカチに穴があれば捨ててしまいます。補修して使うとか、気にせず使うことはほとんどありません。でも、機能の面ではほとんど問題はないはずです。これを人にたとえると、それが短所だったりすれば穴ばかりが気になります。「その穴すてきだね」というような人はあまりいません。ですが、短所は長所と表裏一体です。「決断が遅い」という短所も、「じっくり考えることができる」と置き換えれば長所です。そのようにお互いを見ることができるかどうかだと思います。

風呂敷のような心を持つにはどうしたらよいか未だに自分自身の答えは見つかっていませんが、まずは相手をしっかり評価し認めることが大事だと考えています。「よくがんばったね」とよく言います。でも「よく」は抽象的で、相手はその基準がわからず、「いい加減に評価された」ととらえることもあります。具体的に評価することが大事だと思います。そう言いながら、「今日の料理はおいしかった」すら言っていないことを反省する日々です･･･。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第21号

令和３年９月６日

○胸突き八丁

富士山9合目付近から頂上を望む⇒

人にとって何かを成し遂げる経験は大事です。児童虐待に遭った子ども達は、「安全感の欠如」や「無力感」に悩まされ続けると言います。児童虐待における「無力感」とは、服従が強要されたことにより、自分のことが自分で決められず、そのため無気力となり、課題に向き合おうとしない、あるいはできない姿だと聞いたことがあります。

だから、虐待に遭った子ども達にとって、小さな挑戦はとても大事です。大人から見れば小さな挑戦であっても、主体的であれば、それを成し遂げることは本人にとってはとても大きなできごとです。この世界で生きていけるという自信を持つことにもつながり、無力感からの離脱につながります。

合い言葉である「小さな挑戦」には、「小さな達成感」の積み重ねが自信につながるという意味があります。

「無力感」は、誰でも感じるものです。それは失敗や挫折から来るものであり、どうせだめだからという気持ちを持つことから生まれます。多くの矛盾や失敗・挫折と付き合いながら、その中で自分を鍛えていくカが「自己教育力」ですが、それには自己肯定感が土台にないといけません。たとえ小さな挑戦であっても、成功体験の積み重ねにより自己肯定感を培っていくことが大事です。小さな達成感の積み重ねが大事なのです。

例えば、「いつも2時間しか勉強しないけど、今日から10分長くやってみよう」という小さな挑戦をし、積み重ね、少しずつ増やしていくことです。とかく「3時間しよう」と思って3日坊主になり、挫折感だけが残りがちです。

2年前に富士山に登りました。高山病予防のためにも、5合目で酸素の薄さに2時間ほど体を十分に慣らしてから登るのが良いと聞いていましたが、それを守らず30分ほどで登り始めました。その日は 3,250M の8合目付近の山小屋で1泊しましたが、すでに軽度の高山病を発症し、激しい頭痛に悩まされていました。高山病とは、標高 2000m(高齢者は 1500m)以上の高地で、軽度であれば頭痛に加えて、食欲低下、倦怠感、めまい、何度も目が覚めるなどの睡眠障がいなどが起こる病です。頭痛で何度も目が覚めるたびに、登頂はここで断念して下山する気持ちが固まっていきました。夜、山小屋から眺めた眼下に小さく見える湖上の花火。早朝、山小屋から見た神秘的なご来光。それで十分な気持ちになっていました。その気持ちを払拭したのが、ポカリでした。ポカリが高山病の症状改善に良いと山小屋にいた登山者から教えてもらい、1本 500 円という高い 500ml のポカリを買って飲んだら、頭痛が少し緩和されました。そこで気持ちが前向きになり、8合目まで登ったことが自信の気持ちに変わり、決意を新たに頂上に向けて登り始めました。通常2時間で山頂に着くらしいのですが、「胸突き八丁」と呼ばれる9合目付近まで2時間、そこから山頂までさらに2時間、合計4時間と、通常の2倍もかかりました。9合目までは体力の限界と体調との闘い、9合目からは精神的な限界との闘いでした。

9合目付近から山頂までは、かなりの急斜面で、最後の難関となります。富士登山では、頂上まで残り8丁(約 872 メートル[1丁は 109m])の、胸を突かれたように息が乱れる険しい急斜面が続く道のことを「胸突き八丁」と言います。そこから転じて、「胸突き八丁」が、物事を成し遂げる過程で、いちばん苦しいところという意味にもなったそうです。物事の一番苦しい時、正念場を指す時に、この「胸突き八丁」という言葉が使われます。

いろんな**挑戦をする中で、最後の1～2割は違う質のものが待っています**。挫折の多くはこの正念場でおきます。富士登山で言えば「胸突き八丁」です。途中休憩所もトイレもありません。それを乗り越えられたのは、8合目まで登れた自信。登頂を断念しようかどうか葛藤しながらも、踏ん張って9合目まで登れた自信。登山者同士の励まし。そして山頂にたどり着いた者しか味わえない景色を見たいという気持ちが、背中を押してくれました。

いよいよ就職試験や受験が本格化していきます。それぞれの胸突き八丁を乗り越えてくれると信じています。

「校長室だより第 22 号」は教職員向けのため非掲載とします。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第23号

令和３年１０月４日

○ 石見銀山と温泉津の歴史

ここのところ原稿依頼も多く、また前回22号は教職員向けでホームページ等でも掲載をしていなかったので、久しぶりに校長室だよりを書くような気持ちがしているところです。

今回は、10 月に本校2年生の研修旅行で行くことになっている石見銀山と、石見銀山からの銀の積み出し港となっていた温泉津について、少し専門的に紹介したいと思います。先日研修旅行の事前学習で関連資料を生徒に配付した時に少しだけ石見銀山の歴史について話す機会がありましたが、その続編です。

1552 年頃と推定される書状に、石見銀山に「市町見世棚」の存在が確認できます。つまり、石見銀山は町として見世棚、つまり商店が立ち並び、市が開かれるほど賑わっていたことがこの書状から窺えます。

石見銀山の開発がはじまったのが 1526 年頃で、いわゆる灰吹法とよばれる精錬技術により銀が増産されるようになったのは 1533 年頃です。その後、山口の大内氏、出雲の尼子氏、川本の小笠原氏が銀山をめぐり争奪戦を繰り広げたのち、最終的には毛利氏が石見銀山を直轄地としたのが 1562 年です。その後豊臣秀吉が毛利氏を服属したのが 1584 年のことです。この頃には、世界的にも石見銀山の銀が有名になっています。町の賑わいは、銀山の開発と比例して、争奪戦を戦国大名が繰り広げる中でも進んでいたと推察されます。それだけ、人や物が集まる場所であったのでしょう。人口は最大で 20 万人とも伝わります。今は 400 人ほどです。

毛利氏にとって、石見の制圧は、石見銀山奪取と邇摩郡制圧（積み出し港としての鞆ケ浦や温泉津の支配）の意味で最重要であったことは言うまでもありません。毛利氏の石見制圧は 1556 年頃からで、毛利氏の家臣が銀山に出かけた記録も残るので、石見銀山を一旦は支配下に治めたと思われます。翌年には海上から温泉津へも進出しています。毛利方の吉川経安に、川本の小笠原氏攻めがうまくいけば、恩賞として与える所領が確定するまで、温泉津での船の通航料収入の一部を当面与えるとした記録が残っています。当時すでに積出港として発展しており、船の通航料収入もかなりであったと推察されます。

しかし、その後石見銀山を再び尼子方が奪取して、本庄常光が山吹城主となりました。しかし、その後本庄常光が尼子方から離反した結果、石見国制圧が6年余を費やして終わりました。そのため直轄領となったのが 1562 年です。毛利氏はその後雲南を通り出雲に侵攻し、尼子氏を攻め 1566 年に滅亡させています。

温泉津は、石見で唯一の毛利氏が直轄する関所であることも古文書等から確認できます。1565 年には、石見から出雲へ兵糧米輸送をする船に対し、温泉津での通航料免除を認め、そのことを温泉津奉行人に伝えています。温泉津奉行が、温泉津に入港する船の通航管理や勘過料徴収に関与していたことがわかるもので、毛利氏がこの頃には温泉津に奉行を置いて、港湾支配を進めていたことがわかります

温泉津の町には、仙崎屋、木津屋、小問氏などの商人がいたこともわかっています。仙崎屋は遠隔地貿易も手掛け、木津屋は温泉津奉行に大金を貸すほどの力をもち、小問氏は問丸（運送業・倉庫業などを手がける業者）も営んでいました。細川幽斎（その子細川忠興が明智光秀の娘ガラシャと結婚）が、1587 年に温泉津へ立ち寄り宿泊した時の様子が、信憑性は疑わしいものの史料として残されています。この時細川幽斎と歓談した温泉津商人として、油屋・蕨屋・奈良屋・木村屋・高津屋など多くの商人が記されています。

長篠の戦いがあった 1575 年に薩摩の戦国大名であった島津家久一行が京からの帰りにわざわざ日本海ルートを進み、温泉津に立ち寄った時にも、そうした豪商のいる港町としての一端が窺えます。彼の残した日記「家久公上京日記」には、温泉に入ったとか、芸能集団（お国歌舞伎の原形とも言われる）が来ていたので見物したとか、旅館に宿泊したことが記述されていて、多数の船が来て栄えた温泉津の賑わいが窺えます。

生徒に配布した資料には、石見銀山やその積み出し港である温泉津が栄えていたという歴史の事実が淡々と書かれていますが、その根拠となっているのはこうした古文書（書状）からわかる当時の状況を積み上げていきながらわかってきた事実です。歴史は、覚えるものでなく、その事実から何を学び今に生かすかを、研修旅行を通じて考えてもらうことで、ふるさとの歴史や地域の課題や現状にも思いをはせてもらいたいものです。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第24号

令和３年１０月８日

○ ユリノキとヒマラヤスギにメタセコイア

“故郷の「学校の木」巡り”という島根日々新聞の連載記事で、掛合分校の「メタセコイア」が平成30年6月7日の 117 回で、三刀屋高校の「ユリノキとヒマラヤスギ」が同年6月14日の 118 回で紹介されました。たまたまこの連載記事の著者が私の叔父と言うことも単なる偶然ではないのかなと感じているところです。

校長室にある『掛合町誌』をめくってみると、掛合町が高校設置運動をはじめたのが 1952（昭和 27）年の秋頃で、設置認可が翌年の春。開校式、入学式は同年5月1日で、農業科、家庭科合わせて 26 名の入学があったと書かれています。旧掛合中学校の教室を仮校舎としていたため、創設当時の校舎の写真にはメタセコイアは写っていません。

『掛合町誌』には、1984（昭和 59 年）頃の現在の分校校舎の写真も並んで掲載されていますが、そこにはすでに大きく成長したヒマラヤスギと3本のメタセコイアが確認できます。現在の校舎が完成したのが 1957（昭和 32）年1月で、第1回の卒業式が新築の独立校舎で挙行できたことは大きな喜びであったと町誌には書かれています。それもそのはずで、「校舎建築に先だち、町の財政に余裕がなく、県からの支出も望めず、建設費の財源をどうするかが問題となったが、町民が農協へ貯金し、農協が町に貸し付ける方法で工面した」と『創立十周年記念誌』に書かれているように、地元の高校に対する熱意はひとかたならぬものがあり、教材や教具などは他校に先がけて準備されたと記念誌に書かれているほどで、地元にとって悲願の校舎完成だったとわかります。『創立三十周年記念誌』には、完成したばかりの新校舎の写真が掲載されていますが、まだ植えたばかりの人の背丈くらいのヒマラヤスギとメタセコイアが、よく見ると確認できます。校舎完成を喜ぶ地元民によって植えられた、と連載記事では紹介しています。

一方、三刀屋高校の木は、旧正門を固めるように対で立っているヒマラヤスギと、記念館「蒼雲館」の西側に高さ15メートルを超えるユリノキがシンボルツリーとして紹介されています。先述したように、ヒマラヤスギは、掛合分校にも1本だけ植えられています。ちなみに、旧正門の門柱一対には、自然石ではありませんが大理石の銘板があり、その上にあるレリーフにはどこかしら欧風的なものを感じます。旧木造校舎で唯一残っている記念館「蒼雲館」にも同じことを感じます。昔でいうハイカラな学校という印象がしたのは私だけでしょうか。

連載記事では、「三刀屋の川の水清く　夜昼流れやまぬごと　疲れず倦まず励まし　我が雲南の健男児」と歌われる昭和3年に制定された旧制三刀屋中学校の校歌を冒頭で紹介しています。これは、「倦（う）むことなく、つまり嫌にならず勉励せよと教え導くために、幾千年も流れを止めず、ふるさとを生み育てた母なる清流に人の歩むべき姿がある」という意味だと紹介していますが、『三刀屋高等学校五十年史』にもそのように書かれています。この記念史には、「旧校舎・玄関付近」の写真があります。同じ写真は、三刀屋高校ホームページにリンク（バナー）がある卒業生会である雲南会のホームページでも見ることができます。その写真には、すでに成長したユリノキが確認できることから、当時の校舎が完成した大正末期にはすでに植えられていたと推察されますが、記念史等からはそうした記載や記録が確認できませんでした。

ユリノキは耐寒性のある落葉高木で、花言葉は「幸福」。ヒマラヤスギは、マツ科の常緑高木で、花言葉は「たくましさ」です。メタセコイアは、「平和」や「楽しい思い出」という花言葉がある、ヒノキ科（またはスギ科）の落葉樹です。

三刀屋高校は、2024 年に100周年を、掛合分校は 2023 年に 70 周年を迎えます。創立記念事業を通して、これまでの歴史と伝統の重みを感じ、その誇りを力に変えていくとともに、地域とともにある学校であることを再認識したいと思います。

校長室だより
三刀屋高等学校・掛合分校
第25号
令和３年１０月１１日

○400人の町で生まれた企業

→　石見銀山の間歩

千葉望著『500 人の町で生まれた世界企業　義肢装具メーカー「中村ブレイス」の仕事』(2009 年)を参考にタイトルをつけてみました。今の人口は400人ほどです。

大田市大森町には、中村ブレイス株式会社の他に、ライフスタイルブランド群言堂(運営:株式会社石見銀山生活文化研究所)が本拠を置いています。“手しごと”による「まごころ」を顧客に届ける会社、町の活性化とCSR(企業の社会的責任)を強く意識した会社だと共通して感じています。世界遺産石見銀山に訪れる観光客のために会社が取り組んでおられる清掃活動からもそのことが窺えます。

中村ブレイスの創業者で現会長の中村俊郎氏、株式会社石見銀山生活文化研究所の創業者で社長の松場登美氏の講演を聴いたことがあります。今回、2年生の研修旅行で大森町に行くこともあり、印象に残ったことを紹介します。

中村氏は、働きながら苦学して短大の通信制課程を卒業。その後アメリカの義肢装具メーカーや病院で 2 年半の経験を積んだあと帰国し、Uターンでふるさと大森町に中村ブレイスを起業されたのが 1974 年、26 歳の時。「ブレイス(brace)」は、装具という意味ですが、支える、補強するという意味もあります。講演では、整形外科と連携した仕事のため、3時間かけて鳥取大学医学部などがある米子に幾度となく行き営業をかけて仕事を請け負った話や島根県教育委員会委員長を務められた時も松江に何度も足を運んだ話をされました。拠点を大森に置いたからこそかかる時間と労力ですが、それでも過疎化が進む大森を盛り上げたいと拠点を移されなかったことが印象に残りました。特に印象に残ったのが、障がいがある子どもなどのためにアジアの各地を飛び回って義肢装具をつくられた話です。フィリピンでは現地の職人と協力して、竹細工の義足を開発し、日本で数十万円かかる義足を1万円もかからない値段で提供できるようにされたそうです。一時的に援助して終わりのような国際援助でなく、その後のSDGsにつながるものでした。その中で、人(社員)を育てることの大切さ。障がいがある方のための研究や工夫への努力を怠らないこと。だから患者・顧客にとことん寄り添う気持ちの大切さを学びました。慈善事業ではないので、利益も出さないといけません。そのために、シリコーン樹脂製の足底板(シリコーン)の開発を手がけ、特許申請、製造販売まで行きつく苦労話もされました。講演では、受講者全員に、ご自身の著書である『コンビニもない町の義肢メーカーに届く感謝の手紙　～誰かのために働くということ～』が無料で配布されました。本のタイトルにあるように、講演でも感謝の手紙が紹介されました。地雷で片足を失ったアフガニスタンの少女のために義足をつくる話が描かれた 2009 年の映画「アイ・ラブ・ピース」の撮影エピソードにも心が熱くなりました。

松場氏は、ご主人のUターンを機に大森町に来られた 1981 年に布小物の製造・販売を始められ、今では東京駅近くにショップを出されるほどに会社を育てられました。「群言堂」の反対は「一言堂」。一言堂には、人の意見を聞かず独断で行ったり、討論の場で多くの人の言い分を取り入れず自分の一存で決めたりするやり方という意味があります。

講演では、これまでの経験で学んだ、あるいは肝に銘じてきた様々な言葉を紹介されました。「失敗のない人生は失敗」、「一生の計は今日にあり」、「売り上げ目標より継続目標」、「経済力より文化力」、「竹は根っこで他の竹と手を握り合って、各自がまっすぐ立っている」、「都会は効率で勝負し経済を優先するからこそ、田舎は非効率で勝負」、「ありがとうの反対はあたりまえ」、「優柔不断とは、やさしくやわらかく接して断らないという意味」、「損か得かでなく、やるかどうか」、「知識には限界はあるが、感性には限界はない」、「消費でなく自己投資、自分を満足させるものを買うことが大事」、「伝統は革新の結果」・・・などを書き留めていました。「ものさしで測れないものが、美、豊かさ、幸せ」が特に印象的でした。

大森町には、石見銀山工房むうあの彫刻家吉田正純氏も住んでおられます。私が初任で大田高校に1年ほど勤務した時の美術の先生で、とてもよくしてもらいました。中村ブレイス、群言堂には当時の生徒が就職したので昔から知っていた会社でした。大森町にはなにかしらの縁を感じているところです。2年生には研修旅行で、観光も含め、ふるさと活性化に取り組み、全国や世界を舞台に活動し社会貢献している会社や町の思いや空気を大森町で感じてもらいたいです。

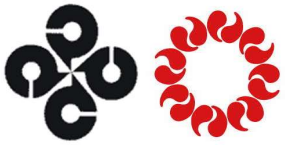
校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第26号

令和３年１０月２０日

○ 島根県×埼玉県高校生交流事業 → 島根県、埼玉県の県章



島根県の県章は、「中心から放射線状にのびる4つの円形が雲形を構成して、島根県の調和のある発展と躍進を象徴し、円形は、『マ』を4つ組み合わせたもので『シマ』と読まれ、県民の団結を表しています。昭和43年11月8日明治百年記念として制定されました。」と島根県のホームページ(引用:島根県/島根県のシンボル)で説明しています。

埼玉県は、「まが玉 16 個を円形にならべたもの。まが玉は、古代人が装飾品などとして大切にしたもの。埼玉県名の由来である「幸魂(さきみたま)」の『魂』は、『玉』の意味でもあり、まが玉は、埼玉県にゆかりの深いものとなっている。また、まが玉を円形に配置したデザインは、『太陽』『発展』『情熱』『力強さ』を表している。県旗は県章を白地に赤く染め抜いたもので、昭和 39 年 9 月 1 日に制定された。」と埼玉県のホームページ(引用:埼玉県／埼玉県章)で説明しています。

勾玉(まがたま)は、天皇が皇位継承する際に大きな意味を持つ三種の神器の一つ「八尺瓊勾玉(やさかにのまがたま)」としても有名で、島根県、特に出雲地方においては歴史上のシンボル的なものの一つであり、玉造温泉の地名の由来としても有名です。島根県の県章も見方によっては勾玉に見えなくはありません。

先日オンライン方式で始まった「島根県×埼玉県高校生交流事業」は、島根県教育委員会が埼玉県教育委員会と、平成30年に高等学校教育に関する連携協力協定を結んでいることから実現し、三刀屋高校他県内4校が参加しました。

ちなみに、令和2年1月には埼玉県立総合教育センターと島根県教育センターとの間でも、「教職員研修における連携に関する覚書」が結ばれています。この覚書を受け、教育センター相互で研修をオンライン視聴するなど様々な連携にむけて動き出す予定でした。折しも調印直後にコロナウイルス感染症が出現、拡大していき、オンラインが授業でも必要な時代が一気にやってきました。調印時の埼玉県側の実務担当であったのが、現在の埼玉白楊高校の校長である黒田校長先生で、島根県側の実務担当が私でした。黒田校長先生とは、平成23年に埼玉であった全国規模の研究大会に参加した時や平成26年に行った埼玉県立総合教育センター視察の時にも関わりがあり、話がスムーズに心やすくできたのはとても大きかったと思っています。今回は、そのつながりから黒田校長先生のお声かけもあって、三刀屋高校もこの交流に参加することになりました。こうした人との繋がりやご縁の大切さをあらためて感じているところです。実は、校長室に飾っている胡蝶蘭と県名と名前の入った扇子は、黒田校長先生からお祝いとして贈っていただいたものです。

ちなみに、今回交流した児玉白楊高校は、生物資源科、環境デザイン科、機械科、電子機械科の4科を有する専門学科の高校です。児玉高校は、室町中期に築城された城跡にあり、2001 年に創立100周年を迎えた学校で、普通科の普通コースと体育コースがある学校です。オリンピック女子柔道で金メダルに輝いた新井千鶴選手の母校です。

研修旅行や部活動の遠征で県外に行くことは、今はほとんどありません。ですが、コロナ禍で、これまでに経験したことのない学校生活を送る高校生にとって、他県でも、首都圏にある埼玉県においても、前向きに頑張っている高校生がいることを互いに知ることは大きな意味があり、学びも大いにあると思います。その一つが視野の拡大、視点の多様化です。今回研修旅行で本校 2 年生が行った島根県立大での高須准教授の講演で、「身近な地域の問題を人は過小評価しがちである。しかし、世界は数え切れない地域で構成されている。問題や事象をみる時に、解像度や距離(問題のとらえ方や見方)を固定化せず、広い視野で多角的な視点をもって評価することが大事」と話されていました。しまね留学の目的の一つと同じで、他県の高校生と交流し、多様な考えに触れることは視野を広げることにもつながります。研修旅行では、石見銀山も訪れました。地域の歴史は、これまで「郷土史」としてお国自慢的に語られることがありました。今は、地域の歴史の評価を日本史全体の中で考察していく「地域史」が主流です。石見銀山がなぜ世界遺産になったのか、その意義が何かを考えることが契機となって、物事を広い視野から捉え直したり探究したりすることにつながればと思います。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第27号

令和３年１１月１２日

○ 善行

合い言葉　「小さな挑戦、小さな善行、大きな志　～自立した大人となるために～」

今年度からのスローガン的な学校合い言葉の中に、「小さな善行」というワードを入れています。先日開催された掛合分校の文化祭の生徒会企画クイズの中で、合い言葉を知っているかが問題として出題されました。言い回しが多少違っていることがあったとしても、おおむねみんなが正解だったことに嬉しさを感じました。言い回しの違いとは、「小さな善行、小さな挑戦・・・」という回答が多かったことです。他者への思いやり、気遣いのことが最初に思い出されることに、さらに嬉しく思いました。

10月 31 日、一畑薬師マラソンに参加しました。新型コロナ感染症拡大の影響もあり、こうした市民マラソン大会の多くが中止となっていたため、ほぼ2年ぶりの大会参加でした。大会の開催には、主催者をはじめ多くの方のご尽力があったと思います。当日は多くのボランティアの方が大会を支えておられ、前日の駅伝大会に出場した平田高校の選手達も手伝っていました。沿道の民家の方々も応援で盛り上げてくれていました。

当日は、久しぶりの大会参加で張り切りすぎたこともあって、名物の1000段の階段登りが終わった直後足がつってしまい、足を引きずり歩きながらのゴールとなりました。それでも10キロの平坦コースの記録とほぼ変わらないタイムでのゴールでした。年齢は重ねても努力に比例して結果の出るマラソンの楽しさを再認識しました。

しんどさと痛さから、ゴール直後はうつむきながら歩き始めていたら、高校生ボランティアの生徒が「お疲れ様でした！」と大きな声でねぎらってくれ、ゼッケンについているタイムチップをはずしてくれました。そこではっとなり、振り返ってゴールに向かって帽子をとって一礼しました。いつもゴール後は一礼するようにしているのですが完全に忘れていました。まだまだ意識しないと一礼すら忘れてしまうことに反省する日にもなりました。

男子ゴルフのアジア・パシフィックアマチュア選手権が 11 月初めにUAEでありました。日本の中島啓太（日体大 3 年）選手がプレーオフを制して優勝しましたが、優勝の歓喜に浸った直後、ゴルフコースにむかって一礼したことに、「これぞ日本人」と称賛の声が現地で上がっているそうです。私たちは、いつも誰かに支えられて、誰かとつながって生きていることを忘れてはいけないし、だからこそ他者への気遣いや思いやりはとても大事です。「感動、感謝、気遣い」の3Kをいつも意識したいとあらためて思ったところです。

あるテレビ番組で、「愛とは何ですか」と年配の方に聞いていました。ある方は、「最大限の思いやり」と答えていました。ちなみに、マザー・テレサが「愛の反対が無関心」と言ったことはあまりにも有名です。

富山県の日本海の浜辺を起点に北アルプス、中央アルプス、南アルプスの山々を走り抜け、静岡県の太平洋の浜辺まで全長 415 キロを 8 日以内に自らの足だけで駆け抜ける日本一過酷な隔年開催の「トランスジャパンアルプスレース（TJAR）」という山岳レースがあります。山々の中には剱岳も含まれています。剱岳は、明治時代に初登頂を争ったことが新田次郎の小説「劒岳　点の記」に描かれたことでも有名な登山自体が難しい山です。そんな山々を走り抜け完走するためには、睡眠も1日2時間程度です。その睡眠もテントで寝たり、道ばたに倒れ込むように寝たりするだけの睡眠です。そんな過酷なレースが今年開催され、テレビ放映もされました。選考会などがあり出場できるのはわずか30人ほどです。しかし、台風の接近で大会史上初めてレース中盤で中止となりました。中止の連絡をスタッフから受けた選手の一人は、2年間の準備と努力やレースの過酷さからか「なんで中止にするのか？」という不満の声を上げていました。しかし、トップを走る選手は違いました。「中止の理由は事故ですか？天候ですか？」が第一声。「天候（台風）です。」との回答に、「それなら良かった。」と答えたあと大会関係者への感謝の気持ちを述べていました。こんな状況下にあっても、またトップを走り一番しんどく悔しいはずなのに、最初に一緒に走る選手や大会関係者に気持ちが向くことに感動しました。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第28号

令和３年１２月６日

やさしい日本語

非常口をあらわしているピクトグラム⇒

土足厳禁。これを日本語があまりわからない外国人にわかりやすく伝えようと思うと何と言えばいいでしょうか。避難所。これならどう伝えればいいでしょうか。ピクトグラムではどう表現されているでしょうか・・・

先日、掛合交流センターで開催された「災害時外国人サポーター」養成研修に参加しました。災害が起きると、スマホを持っていないことが多いときく技能実習生をはじめ外国人住民の方は情報が届かなかったり、届いていても「難しい日本語」で意味がわからなかったりして困ることがあるそうです。このため、災害時外国人サポーターが避難所等に出向いて、情報を「やさしい日本語」にしたり、外国語に翻訳したり、困っていることを聞き取ったりされています。

災害時のボランティア（被災者支援）には、がれき撤去などニーズに応じた国籍を問わない支援と、言語等を支援する外国人支援とがあると今回の研修で認識しました。私たちは、ストック情報とフロー情報で、災害時の適切な行動判断につなげます。ストック情報とは、今まで得た知識や経験に加え訓練などで蓄積された情報です。フロー情報とは、災害時の危険情報やそれに伴う避難などの対応情報です。この両方の情報を使って、少しでも適切な行動につなげようとします。それでもバイアスがかかってしまうことがあります。バイアスとは、例えば災害が生じ危険が身に迫っている状況下において、多くの人は何となく「自分は助かるだろう」と思ってしまうような先入観のことです。外国では避難訓練を日本のようにしない国もあるし、訓練を受けていても日本の災害に対応した訓練を受けていないこともあります。それに加えフロー情報がわからないと災害時の不安はとてつもなく大きくなります。

本研修は、日本語以外の言語が話せなくもよいとされていたので参加しました。その意味が研修を通じてわかりました。災害時、外国人にとっての3つの大きな壁がより高くなります。言葉の壁、こころの壁、制度の壁の3つです。外国人の母国語でなくても、やさしい日本語で伝えようとすることが、つまり言葉の壁を低くしようとすることが気遣いにつながり、こころの壁を低くすることになるとわかりました。研修で、避難所に外国人が避難していると仮定した模擬演習がありました。現在雲南市に来ておられる技能実習生の方に、困っていることを聞き取るものでした。講師の方からは、なによりも安心を届けてくださいと言われました。しかし、実際は質問攻めにしただけでした。「名前は何ですか？」「どこの国から来ましたか？」「避難所生活で困っていることはありますか？」・・・。まず自己紹介をすること。立っていたら椅子等に誘導して座ってもらうこと。やさしい日本語で話すこと。・・・いろんな気遣いに欠けていたことにあとで気づかされました。質問の内容がよくわからず不安そうな目をされていたことが印象に残った演習でした。

20年以上前に韓国旅行に行った時のこと。ホテルの近くで百貨店の倒壊事故がありました。町は騒然とし、テレビも報道一色になりましたが、流れる映像には更地にがれきあるようにしか見えず、韓国語もわからないから何が起きているかわからず不安になったことを覚えています。当然日本でも報道され、日本から安否確認の連絡があってはじめて事の重大さを知りました。これが地震などで被災者となって海外にいたら、不安は相当のものだったと思います。

今回の校長室だよりでは、少し文字を大きくし、読みやすくすることに少し気持ちを置いてみました。ほんの少しの気遣い、善行・・・できること、気づいていないことはまだまだ多そうです。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第29号

令和３年１２月２４日

○本物

内モンゴルのイメージ（草原のゲル）⇒

令和3年も終わろうとしています。2年前には、これほど新型コロナウイルス感染症が社会生活、ひいては人生そのものにも影響するとは考えてもいませんでした。三刀屋高校生、掛合分校生が楽しみにしていた台湾旅行も、中止、変更を余儀なくされました。実施した県内研修旅行では、県内の魅力の新たな発見、気づきがあったものの、より視野を広げる意味でも、一日でも早くふたたび海外に気軽に行ける日が戻ることを祈るばかりです。

20年以上前に中国の内モンゴルに一週間ほど旅行で行ったことがあります。といっても、観光バスで観光地や名所旧跡を巡るわけではありません。一週間、馬に乗ってモンゴル高原の草原とゴビ砂漠を横断するというものでした。宿泊はゲルという遊牧民の伝統的な移動式住居。そのゲルも自分で建てる体験をするというかなり変わったツアーでした。砂漠でたてたゲルは真夜中の砂嵐で倒壊し、砂の上で夜を明かしたことありました。

ちなみに、内モンゴルに興味を持ったのは、山崎豊子の小説『大地の子』の主人公である陸一心が、文化大革命の時に送られた労働改造所のあったところだったからです。そこで、残留日本人孤児であった彼が羊飼いをしながら日本語を学んだ草原に一度は行ってみたいと思ったのが発端です。NHKでテレビドラマ化された時も、モンゴル高原の草原風景は壮大であり印象的でした。

内モンゴル旅行での最初の夜。草原はまさしく満天の星空でした。高原だからか、星空も近く、杞憂という言葉のごとく、満天の星が地面に落ちてくるかの錯覚を覚えたことを今でも忘れません。また、翌朝「地平線」に登る太陽を見たのもこの時が最初で最後です。

このツアーで衝撃だった体験はほかにもたくさんあります。例えば、休憩で馬から降りた際にふと手綱を離したために、馬が草原の彼方に向かって逃げ出しました。ガイド役の遊牧民の方に、「追うな！」と制止されました。理由は、山などのランドマークのない広い草原では、慣れていないとすぐ自分の位置がわからなくなって迷うし、探すこともできないからでした。また、途中休憩させてもらった現地の遊牧民のゲルで、羊の血の入ったチャイ（ミルクティーのようなもの）を振る舞われました。血には塩分があり、海がなく川が少ない高原では塩や水が貴重だとあらためて実感しました。当然トイレは水洗ではありません。日本のあたりまえとの違いにとまどいました。夕食に、生きている山羊を旅行者が処理して食する経験もしました。と言っても、食べることは感傷的になってできませんでした。内モンゴル遊牧民のナダム草原観光祭に参加し、モンゴル相撲で張り切りすぎて指を骨折したことも忘れられない思い出です。旅行の途中で草原から砂漠までの移動にバスを使いましたが、15時間以上かかったバスでは、車窓の風景がまったく変わらず、つまりいつまで経っても同じ草原の風景が広がっているだけで、バスが先に進んでいるのかどうか不安になりながら、時間の流れの違いにとまどったこともありました。

このような体験は、決してオンラインやVRでは味わえないものです。その土地に行かないとわからないことや空気感があります。ICT化が進むことで様々なことが便利になってよいのですが、それでは決して得られないことやわからないことがあることは忘れないようにしないといけないと思っています。

授業での話し方を勉強しようと、40代の時に落語や漫才を聞くことに少しはまったことがあります。そこで、「間（ま）」や「場の空気を読む力」、そして「観客を取り込む力」の大切さを感じました。同じ噺家の同じ落語をテレビで聞くのと、実際に寄席で聞くのとはやはり違います。観客の雰囲気や観客との間をうまくつかんだ寄席だと自然に笑ってしまうことも、テレビだとそこまでということもままあります。コミュニケーションも同じです。対面でしか伝わらない、SNSでは誤解してしまうことがあることも、コロナ禍だからこそ強く考えていく必要があると思っています。

校長室だより
三刀屋高等学校・掛合分校
第30号
令和３年１２月２４日

○終業式講話（抜粋）　「気遣い」

令和3年もあとわずかとなりました。今年も新型コロナウイルス感染症に振り回された1年でしたが、悲観するだけでなく、その中でどう生き抜いていくかをそれぞれが考え行動した1年でもあったと思っています。　（中略）

先日地域の方から、挨拶の良さについて、お褒めいただくお葉書をいただきました。挨拶は、小さな善行でもあります。他者を気遣う第一歩です。これからも挨拶の励行を心がけていって欲しいと思います。

さて、2学期、2年生の研修旅行がありました。行き先の一つに石見銀山がありました。石見銀山のある大森町には、中村ブレイスという、義肢（義足義手）などをつくっている全国的にも有名な会社があります。本校では校長室だより等で紹介するのみとなりましたが、分校では訪れる機会に恵まれました。中村ブレイスは、大森町の古民家改修などを長年かけておこなって町並みを整備し、若者の雇用だけでなく、移住・定住にも大きく貢献したことで、地域活性化という意味でも有名な会社です。本校のPTA会報で紹介したパラリンピックの車椅子テニスに出場した三木選手も、この会社のサポートを受けています。会社を訪れた際に、生徒からの質問に答える形で話された中村社長の話がとても印象的だったのでここで紹介します。

質問は、「中村ブレイスで働く上で大切なことは何ですか」というものでした。「手先が器用で、障がい者福祉に関心があること」と回答されると私は思ったのですが違いました。社長は、「ものづくりに興味があればもちろんいいが、大事なのはコミュニケーション力。患者さんに心から寄り添って話を聞き、丹念にやりとりしながら、体の一部となる義肢を本当に患者さんが納得できるものに仕上げていこうとする患者さんへの思いや使命感」という内容の回答でした。手先が器用かどうかよりも、そこに思いがなければだめなのだと思いました。料理も同じで、料理が好きで包丁使いが上手でも、食材や食べる人への思いがなければいい料理は作れません。勉強ができても、スポーツが得意でも、そこに思いがなければ、志がなければ自己実現にはつながっていきません。そのことをあらためて思いました。中村ブレイスの主な仕事先は、出雲や松江、遠くは米子や広島にある病院です。地域活性化のためにあえて仕事先には遠い大森町に会社があります。患者さんとの物理的な距離よりも、心理的な距離がとても大事だと思っているからこそ、大森町で会社がやっていけると社長のお話からもわかりました。

仕事には相手があります。工場での仕事であっても、その先に製品を手にする消費者がいるし、働く仲間がいます。人の役に立たない仕事はないと思っています。直接的か間接的かの違いだけです。だからこそ、仕事でもなんでも他者を気遣う気持ちを持つことは大事です。これは学校生活でも同じです。

合い言葉を「小さな挑戦、小さな善行、確かな（大きな）志」としました。相手や仲間を気遣うことが善行でもあります。照れくさい時もありますが、小さな勇気、挑戦で相手を気遣えばお互いが幸せな気持ちになります。その時もらえる感謝の言葉は、自分の進むエネルギーにもなります。3K　つまり、感動、感謝、気遣い・・・という言葉で、校長室だよりなどでこうしたことを話したこともあったと思います。相手を気遣うことは自分の成長にもつながります。年末年始で人と会う機会が多い中、人とのつながりを大事にしていくことに思いを寄せてみましょう。　（後略）

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第31号

令和４年１月１１日

○3学期始業式講話（抜粋）

＜前略＞新学期のはじまりにあたり、「謝」という漢字について話をしたいと思います。感謝、謝辞（を述べる）や謝罪、陳謝の謝です。

「言」＋射撃の「射」から成る漢字です。「射」は矢を放つことです。矢を射れば弓の緊張は解けます。つまり、言葉に出すことにより、心の緊張が解け、和らぐことをあらわしています。

謝罪という言葉からこのことを考えてみましょう。謝罪を相手に伝える言葉は、「ごめんなさい。すみません。」。英語では、I'm sorry。中国語では不起と言います。ポルトガル語では「Me desculpe（ミ・ディスクウピ）」。ドイツ語では「Entschuldigung（エントシュルディグング）」、イタリア語では「Scusi（スクーズイ）」です。韓国語では、ミアナムニダです。

次に感謝を相手に伝える言葉は、「ありがとう」です。英語はもちろん Thank you。中国語では、謝謝。ポルトガル語では「Obrigado（オブリガード）男性」、ドイツ語では「Danke schon（ダンケ・シェーン）」、イタリア語ではグラッツィエ（Grazie）です。韓国語では、カムサハムニダです。

ハワイでは、親指と小指を立てて、手の平を見せる「ハングルース」にもその意味があり、挨拶代わりに使われるそうです。

世界を旅行する時に、「ありがとう」「ごめんなさい」に「愛している」の3つの言葉が話せればだいたいなんとかなると外国航路の船員さんが冗談で言っていたことを聞いたことがあります。その時、妙に納得したことを覚えています。

なにが言いたいかというと、すべて相手を思いやる言葉なのです。終業式では挨拶が気遣いの第一歩という話をしました。

3つのうちどれか1つだけすべての言語を、それこそドラえもんの力で覚えられるとしたらどれを選びますか・・・やはり、「ありがとう」ではないでしょうか。「ありがとう」は、他の国の言葉も知っている人が多かったのではないでしょうか・・・。

挨拶に加え、素直に「ありがとう」や「ごめんね」が言え合える仲間とはお互いの信頼が強まります。子どもの頃から最も口にした言葉の一つではないでしょうか。

謝罪は、自分が原因で相手の負担になっていることを自ら認めることです。つまり、「ごめんなさい」は、自分の言動で相手が傷ついたことを自ら認め、相手の心の溝を自分のエネルギーで少しでも埋めようとするための言葉とも言えるのではないでしょうか。

一方「ありがとう」は、言った方も言われた方もエネルギーが増す言葉だと考えます。だから、「ごめんなさい」と言われた相手が、「あやまってくれてありがとう」と言えば、お互いが幸せな気持ちになれます。＜中略＞

コロナ禍での生活だからこそ、「謝」の感性を大事にしていきましょう。

最後に、さきほどハングルースの話をしました。意味は、「アロハ」「じゃあね」「気楽に行こうぜ」「ありがとう」といった使い方をするそうです。

少しハングルースの手の形をしてみてください。あまり力が入らないはずです。今までがんばってきたのだから、今日はリラックスして行きましょうという感じです。「頑張れ」は素敵な言葉ですが、これから共通テストに臨むみなさんは、このハングルースの気持ちも持って、これまでの努力の成果を十分に発揮してください。＜後略＞

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第32号

令和４年２月３日

○インドの旅（１）

タージ・マハル⇒

島根県でもはじめてのまん延防止等重点措置が適用され、全国的にも感染者の急増が収まらない日が続いています。各種会合なども中止や変更を余儀なくされ、部活動も9月に続き制限されています。まさしく混沌とした状況が続いています。

混沌とは、『広辞苑』によると「物事の区別がはっきりしないこと。また、そのさま。もやもやしている状態。」となっています。事態が流動的で、どう結着がつくかわからないさまとも言えます。このような混沌とした状態がもう2年あまりも続き、閉塞感を持つ人も多いと思います。

かれこれ20年以上も前にインドを旅したことがあります。一週間あまりインドを旅した印象を一言であらわすと、同じく混沌。違う表現をすれば、カオス、無秩序でしょうか・・・。インド旅行をした人は、何度も行きたくなるか、全くその逆かの両極端だと聞いたことがあります。たかのてるこ著『ガンジス河でバタフライ』を読んだ時、私自身が旅した時の光景やその時々の印象を何度も思い出しました。ぜひ読んでみてください。

私は、秩序がしっかりしていないと落ち着きません。仕事や机、そして部屋も整理整頓されていないと落ち着きません。先が見えないと不安になります。多くの人がそうかもしれません。道ばたに牛が横たわり、人が沐浴し、そこを車やオートリキシャ（三輪タクシー）がけたたましくクラクションを鳴らしながら我先にと走っていくインドの街の風景は、カルチャーショックそのものでした。マックバーガーにチキンバーガーしかなかったことも、カレーはチキンカレーばかりだったことも、知識として理解しているのと、体験して理解するのとは違うことを実感しました。

海外旅行に行けない状況が続く中、少しでも視野を広げたり、本を読んだりする契機になればと思い、インドでの旅のエピソードを何回か紹介したいと思います。もちろん、20年以上も前のことなので、経済状況も含め変わっていることがほとんどだと思います。ステレオタイプに陥らないよう読んでいただければと思います。

写真はタージ・マハルです。ムガル帝国のシャー・ジャハーンが愛する妃ムムターズ・マハルのために建てた廟（お墓）です。白大理石の美しい建築で、ペルーのマチュ・ピチュと同時期の 1983 年という早い時期に世界遺産に登録されています。

大理石の白さを守るため、つまり排気ガスなどから守るためという理由でバスの駐車場はかなりタージ・マハルから離れていました。駐車場からは乗り合い自転車に乗り換えました。川岸に建つタージ・マハルですが、離れてはいたものの対岸に煙を出す工場が見え、間近に見るタージ・マハルは少し黄色くなっていました・・・。

いよいよタージ・マハルの敷地に入るというところで、現地ガイドの発言に耳を疑いました。「敷地内では、スリもいて危ない。ひどい例では握手を求められ応じた観光客が、手のひらに忍ばせていた麻酔針で眠らされた上に売り飛ばされたこともあった。ガイドとして付き添い観光客の安全確保のための行動をとると、次私が来た時に報復を受ける。トラブルに巻き込まれたくないからゲートから先は個人責任でお願いしたい。」というものでした。真偽のほどはわかりません。ガイドが怠けたかっただけかもしれません。しかし、一緒にいた観光客のうち数人は、ゲート入場前に受付で預けるように言われたかばんが、帰る際に紛失していました。受付の人は預かっていないの一点張りでした。私も、話しかけてきたインド人らしき人が、勝手に英語でタージ・マハルの説明をはじめ、説明を聞いたからと高額なガイド料を請求されました。日本でもまったくスリがいないわけではありませんが、日本の観光地は、いや日本は治安が良いのがあたりまえの感覚になっているので、自分の身を自分で守らないといけないと感じたタージ・マハルでの約1時間はとても長く感じたことを覚えています。日本の中世（鎌倉～戦国時代）も混沌とした世だったと考えています。無秩序ゆえの自由があり、だから惣村が発達するなど、農村は団結して安全を確保していました。今の混沌とした時代も、助け合いという団結が重要と感じているところです。

校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第33号

令和４年２月１４日

○インドの旅（2）

町の風景⇒

今回は、インドの旅の続編として、「あたりまえと思っていたことがあたりまえでなかった」ことに気づかされた出来事についてです。

海外旅行に行った時、現地の空港に着いてまず私がすることが両替です。ツアーの場合、添乗員や現地ガイドさんが、現地通貨でしか買えないものがあった時のために少額（1万円程度）両替してくれることが多いのですが、レートが悪い場合もあるため、時間があれば空港の両替所で1万円程度両替することにしています。例えば、100円＝1．1＄が空港のレートで、現地ガイドさんのレートが100円＝1＄だった場合、空港での両替がよいことがわかると思います。しかし、空港などの両替所では現地のお金を基準に表現されているため、「1＄＝JPN91．000」などと表示されています。つまり、1万円を換金すると、1万円÷91＝109.8＄（100 円＝約 1.01＄）になるということです。頭が回らないので、①現地の町の両替所、②空港の両替所、③現地ガイドさん等による両替、④日本の空港等であらかじめ両替、の順番に勝手にレートのよい順を自分で決め、②が安全安心でレートも悪くないと決め込んでいます。

デリー空港でも②を選択しました。1万円両替すると、渡されたのはインドルピーの札束。しかも、日本のように紙の帯封でなく、なぜか巨大なホッチキスで何十カ所も留めてありました。ホテルに着いてから、ホッチキスをはずすのに1時間以上かかりました。でも穴だらけのその紙幣を使うことはほとんどありませんでした。なぜかというと、現地ではドルや円での支払いを求められたからです。免税店ではカードで払うこともありました。現地で一番信用されている通貨が現地通貨では必ずしもないということです。子どもに片言の日本語で「千円ちょうだい」と言われたこともありました。こうした状況では、インフレが起きることもあります。アフリカのジンバブエでは 100 兆ジンバブエドル紙幣が発行されたことがあります。最終的には日本円に換算して 1 円にも満たない価値となり、今ではもう使えなくなっています。話は戻りますが、インドのホテルでは、入口には機関銃等で武装した警備員がいて、一見紛争地の大使館のような感じでした。町で売られているもの、例えばペットボトルなども、水道水や井戸水を入れてふたをしただけのもが売られていることもあるから注意するようにとガイドさんに言われていました。そんな中、町の屋台で買い食いすることは、日本のお祭りで買い食いするのとは状況がまったく違っていました。

余談ですが、同じ頃にトルコ旅行に行った友人が、出発前の添乗員の話を、トイレに行っていて聞き漏らし大変な目に遭ったことがあります。それは、「今日本の空港で数千円をドルに換金しておいてください。現地の空港で、帰国の際に空港使用税を一人一人に払ってもらう必要がありますが、トルコリラは使えません。ドルで払うことになっています。現地での両替は難しいです・・・」という説明でした。聞き漏らした友人は、現地で両替の困難さは想像以上だったと話してくれました。日本で日本円を使うことはあたりまえではないことだと認識しました。

これも余談ですが、現地の水を飲むと腹を壊すと聞いていたので、日本から2リットルのペットボトルを2本持って行きました。現地で買った水は歯磨きなどで使っていました。ですが、腹を壊しました。ガイドさんには、「サラダには水で洗った野菜も入っている。アイスクリームなどにも現地の水は使われている。」と後で言われました。もちろん日本から薬は持って来ていましたが効きませでした。でも不思議とガイドさんからもらった現地の薬を飲んだらききめ抜群でした・・・。

学んだことは、あたりまえをあたりまえと思わず、感謝し、なにがあたりまえの要因となっているか物事を第三者的に俯瞰して見られるようになることが大事であるということです。そして。「郷に入れば郷にしたがえ」ということ。

最後に、これは20年前の状況であり、訪れた場所でたまたま出くわしただけということもあること。つまり、ステレオタイプに陥らないように読んでいただければ、それこそが多角的複眼的に物事を見ることかと思っています。

校長室だより
三刀屋高等学校・掛合分校
第34号
令和４年３月１日

○令和3年度卒業式式辞(抜粋)　「向かい風をつかめ」

(前段および一部略)今日がお子様の卒業式に立ち会うのが最後になる保護者の方もいらっしゃると思います。義務教育と違って感慨もひとしおかと思います。そういう意味でも、今日のような形での卒業式となったこと、心よりお詫び申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与した卒業生のみなさん、卒業おめでとうございます。みなさんは本校所定の全課程を修了しました。この3年間は、これまでの高校生が経験したことのない日々でした。苦難の連続だったと思いますが、それを乗り越えるため、あきらめず日々努力されたことに心より敬意を表します。そして、その姿で学校や地域を盛り上げ勇気づけてくれたことに感謝します。ありがとうございました。

門出に私から言葉を贈ります。「自立した大人になるために」という言葉を今年度の合い言葉に添えました。自立した大人とは、この3年間のように、苦難の道のりであっても、自身の力で、時には仲間と助け合って、前に進もうとする意欲がある人になってもらいたいという思いも込めていました。

ヨットは、風上に向かってまっすぐは無理ですがジグザクなら進めます。向かい風も推進力に変えているのです。「ウインド・カー」って知っていますか。小学校理科の「風やゴムの動き」の時間などで作った人もいるかもしれません。正面からの風、つまり向かい風を受けてまっすぐ風上に向かって走る車です。飛行機も向かい風で飛び立ちます。苦難も発想や考え方を変えれば、大きな力になるのです。威風堂々しっかり前を向きこれからの道を歩んで下さい。「向かい風をつかめ」。これを贈る言葉とし、式辞といたします。

→ウインド・カーのイメージ図

※ウインド・カーの原理

「前方からの風で風車が回り、風車の軸の回転がゴムにより駆動輪に伝達されることで、車を前方に進めようとします。しかし、車は風を受けて後ろ向きに押されています。このため、駆動輪と床の摩擦抵抗力が風の抵抗力に勝ると、前に進みます。」

校長室だより
三刀屋高等学校・掛合分校
第35号
令和４年３月２４日

○令和3年度終業式講話（前段及び一部略）　「満つれば欠ける」

日光東照宮を知っていますか。日光東照宮は、元和3（1617）年に徳川初代将軍家康を祭神としておまつりした神社です。日光東照宮の観光ハイライトと言えば本殿入り口の陽明門です。1日中日暮れまで見ていても飽きないことから、別名日暮らし門とも呼ばれます。12本の柱で支えられていて、すべて曲線の文様が施されています。陽明門をくぐり終わるところ、よく見ると柱の一本だけが逆さになっているのに気づきます。なぜ逆さなのでしょうか。諸説あるようですが、不完全な柱を入れることで戒めにしたのではと言われています。つまり、完成と思えばあとは満足感から努力をしなくなるということです。そういう意味では、陽明門は未だ完成されていません。

私自身のことですが、校長室だよりを月3回ペースで発行し、年間36号を目指していましたが、35号で終わりそうです。約2年前、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止となった隠岐の島ウルトラマラソンに再度出場できるまで、休みの日を中心に月間100キロは走るという目標も、先月20か月目で途切れました。しかし、達成できなかったからこそ、反省や振り返りをして、その課題を認識し、その克服に向かって新たな意欲が沸いているところです。

校長室だよりで、富士山登山の「胸突き八丁」について触れたことがあります。挑戦をする中で、最後の1～2割は違う質のものが待っているというものです。挫折の多くはこの正念場でおきます。しかし、挫折とするか、意欲に変えるかは自分しだいです。挑戦は何度でもできます。

高校生活も思いどおりにいかないことが多いと思います。今は、新型コロナウイルス感染症の影響で、自分の努力ではどうしようもないことで思いどおりにいかないことが多いからなおさらです。社会ではうまくいかないことや理不尽なことがたくさんあります。そこで逃げたり、つぶれたりしないためにも高校生活の中で様々な経験を自ら選んで、挑戦して欲しいと思います。自分の限界を少し超えた目標設定、大きな志を確かにもって、高みを目指し、自分ができることは最大限やっていきましょう。ただし、頑張ることと無理をすることは違います。自分から助けを求めることも大切な勇気、そして能力であることも忘れないでください。達成感は大事ですが、満足せず、自分に負けず、コロナに負けず、弱音も吐きながら頑張りを続けてください。